

資産運用会社概要レポート: 日本 2025

日本における資産運用会社残高上位 60 社を比較

モーニングスター

2025 年 12 月 15 日

目次

- 2 主なポイント
- 3 はじめに
- 5 上位ランキング
- 17 運用会社ファクトシート
- 48 付録

元利 大輔
モーニングスター・ジャパン
マネジャー・リサーチ部長
+81 3 4510-5492
daisuke.motori@morningstar.com

橋本 直子
シニア・アナリスト

柳 珠里, CFA
アナリスト

シャルマ モヒト
アナリスト

Bridget B. Hughes, CFA
Senior Principal, Parent Research

Alyssa Stankiewicz
Principal, Parent Research

Maciej Kowara, Ph.D.
Principal, Manager Research

重要事項

Morningstar のアナリストの行為は、倫理規程/職業行為規範ポリシー、個人の証券等取引（またはこれに準ずる）ポリシーおよび投資調査ポリシーによって規定されています。利益相反に関する詳細については、以下をご覧ください。
global.morningstar.com/equitydisclosures

概要

モーニングスターでは、米国、欧州などで資産運用会社概要レポートを定期的に発行している。このレポートは、各地域におけるオープンエンド型ファンドと ETF の運用資産残高上位の資産運用会社を、投資家が評価する際に活用できるものである。本レポートは、その日本版であり、初年度となる今回、日本における運用資産残高上位 60 社の運用会社を取り上げている。

本レポートには、モーニングスターのデータ、レーティング、および分析が盛り込まれている。主要なものとしては、モーニングスター・メダリスト・レーティングにおける 3 つの評価軸の 1 つである、モーニングスター運用会社評価である。運用会社評価は、資産運用会社が投資家の最善の利益のために、投資家の資金をどれだけ適切に運用しているかについて、モーニングスターのアナリストの見解を示すものである。これには、企業の投資文化、ビジネス慣行、報酬体系、また運用費用を決める際の理念などを分析した結果が含まれる。本レポートに掲載されている資産運用会社の半数以上は、モーニングスターのアナリストによってカバーされており、レポートにはそれぞれの運用会社評価が表示されている。アナリストがカバーしていない運用会社については、定量的な手法を用いて評価が付与されている。

本レポートは大きく 2 つのセクションに分かれている。最初のセクションでは、市場シェア、成功率、モーニングスター・レーティングなど、さまざまな指標における上位の運用会社を紹介する。次のセクションでは、モーニングスターのアナリストがカバーする運用会社 31 社について、各社のモーニングスター運用会社ファクトシートを掲載する。

本レポートのファクトシートには 60 社中における順位が示されている。これらの順位、および本レポート内のデータは、特段の断りがない限り、2025 年 9 月 30 日時点のものをを用いている。順位は、優れているものから劣っているものへの順に示されている。ただし、運用資産残高のように、グループ内で最大から最小の順に示される場合もある。表示されるデータ項目の算出に関する詳細については、付録に掲載している。

なお、本レポートでは運用会社名を識別可能な範囲で簡略化して表記している。また、外資系運用会社については、グローバルで使用されている名称を記載している場合があることをご了承ください。

主なポイント

- ▶ 大手金融機関グループ傘下の日系資産運用会社が、強固な国内販売網を活用し、日本の投資信託・ETF市場で引き続き大きなシェアを有している。
- ▶ 外資系資産運用会社は、販売会社のファンド選定におけるガバナンスの取り組み、海外資産に対する投資家需要の高まり、および日系資産運用会社からの外部委託により、日本における市場シェアを徐々に拡大している。
- ▶ パッシブ運用は急速に成長しており、インデックス・ファンドが市場全体に占める割合は、2015年の10%から2025年には37%に上昇した。これは運用費用の低い商品提供が増えたこと、およびオンライン・チャネル経由での投信販売が増えたことによる部分が多い。
- ▶ 2024年に大幅に改定されたNISA制度（通称: 新NISA）により、投資信託市場への資金流入は大幅に押し上げられた。つみたて投資枠を通じた長期投資資金の流入も多く、NISA口座を経由した資金流入額は、投資信託市場の約30%を占めている。
- ▶ 日本銀行（日銀）による大規模なETF購入により、ETFの運用資産残高は一部の日系運用会社に集中しており、市場シェアはやや歪められている。また、日銀のETF購入により、これら日系資産運用会社のパッシブ運用の運用資産残高が押し上げられている。
- ▶ 運用費用の低いインデックス・ファンドに注力する運用会社や、グローバルな提携関係を積極的に活用している運用会社などが、高い純資金流入率（純資金流入による残高成長率）を達成している。
- ▶ 日本市場における情報開示の充実度の低さは依然として課題であり、投資家の信頼や、資産運用会社を評価する際に影響を与える可能性がある。
- ▶ 運用費用の低さは、モーニングスター・メダリスト・レーティングで高評価を得るための主要な要因となっている。ブラックロックなどのパッシブ運用のラインアップが多い運用会社が、メダリスト・レーティングの上位を占める一方、運用費用が高いアクティブ運用のラインアップが中心となる運用会社は低い評価を受ける傾向にある。
- ▶ より絞り込まれたファンド・ラインアップを持ち、ファンド償還が少ない資産運用会社は、より高い成功率を達成している。フィデリティやあおぞら投信などの運用会社が、優れたリスク調整後リターンを示した。

はじめに

歴史的に、日本の投資信託・ETF 市場（以降、総称して「ファンド市場」）は大手金融機関グループ傘下の資産運用会社が大きなシェアをもっていた。これらの運用会社は、グループ内の銀行や証券会社が有力な販売会社となり、その販売力を活用することで、ファンドの運用資産残高を拡大してきた。日本における純資産総額上位の資産運用会社である野村アセット、大和アセット、三菱 UFJ アセット、三井住友 DS アセット、およびアセットマネジメント One は、いずれも大手金融機関グループに属している。こうした構造から、外資系資産運用会社にとって日本市場への参入と市場シェア拡大の機会は限られてきた。

近年、銀行や証券会社などの販売会社では、ファンド選定プロセスにおけるガバナンスを強化する動きが顕著になっている。金融庁による「顧客本位の業務運営に関する原則」などを受け、販売会社はファンド選定プロセスにおけるガバナンスを強化し、投資家の利益を優先することが求められている。これに対応し、販売会社は単にグループ内の商品を提供するのではなく、より質が高く競争力のある運用商品を求めるようになってきている。投資家の海外資産への投資需要が高まる中、長期にわたる優れた運用実績と高い外部評価（モーニングスター・メダリスト・レーティングが高いなど）を受けている海外資産戦略を採用する新たなファンドの設定が増えてきており、外資系資産運用会社は、海外資産戦略における専門知識を活用して、日本における市場シェアを徐々に拡大している。さらに、多くの日系資産運用会社は、アクティブ・ファンド、特に海外株式に投資するファンドの運用を、外資系資産運用会社に外部委託している。この仕組みにより、外資系運用会社は日系資産運用会社の強固な販売網にアクセスできる一方、日系運用会社はより幅広い戦略を提供できるようになる。本レポートにおける運用資産残高の数値は、このような外部委託の仕組みによる運用資産残高を外部委託先である運用会社に配分していない点に留意されたい。したがって、日系資産運用会社の実質的な運用資産残高は、本レポートで示されている数値よりも低い可能性が高い。また、外資系資産運用会社の日本における実質的な市場シェアは、本レポートで示されるよりも高い可能性がある。

パッシブ・ファンド（インデックス・ファンド）は伝統的にアクティブ・ファンドよりも信託報酬が低く、銀行、証券等の従来型の対面販売チャネルにとって収益性が低いため、歴史的に市場シェアは低い水準にとどまってきた。しかし、過去 10 年間で、日本籍の公募追加型株式投資信託（ETF 除く）におけるインデックス・ファンドの残高シェアは劇的に増加しており、2015 年 9 月末の約 10% から 2025 年 9 月末には 37% へと、約 4 倍に拡大した。従来の対面販売よりもデジタル・プラットフォームを選好する投資家が増えていることもあり、インデックス・ファンドの急速な成長は、主にオンライン証券等のオンライン・チャネルを通じて販売される、運用費

用の低いインデックス・ファンドによって牽引されている。特に、三菱 UFJ アセットの「eMAXIS Slim」シリーズなど、極めて低い信託報酬のファンドが、市場におけるコスト競争を激化させた。2024 年からの新 NISA もこの傾向をさらに加速させている。新 NISA は非課税投資枠の拡大と非課税保有期間の恒久化により、個人投資家の長期的な資産形成への関心を刺激し、ファンド市場全体への資金流入を押し上げた。2024 年には、公募追加型株式投資信託（確定拠出年金、SMA/ファンドラップ専用ファンドを除く）への資金流入額の約 30%が、インデックス・ファンドが大部分を占める NISA つみたて投資枠を含む新 NISA によるものであり、市場拡大に大きく寄与している。

日本の ETF 市場は独特な状況にあり、2010 年代から 2020 年代初頭にかけての日銀による大規模な ETF 購入の影響を強く受けている。日銀の多額の ETF 保有残高は、野村アセット、大和アセット、アモーヴァ・アセットなど一部の資産運用会社に集中している。日銀が引き続き多額の ETF を保有する限り、日本における資産運用会社全体の運用資産残高シェアは、この要因によって大きく歪められた状態が続くことになる。アクティブ ETF については、日本では 2023 年に導入され、初のアクティブ ETF が 2023 年 9 月に上場した。SBI グループが 2026 年にアライアンス・バーンスタインと提携してアクティブ ETF 市場に参入すると最近発表するなど、拡大の兆しが見られている。しかし、2025 年 9 月末時点で上場しているアクティブ ETF は 19 銘柄のみで、純資産総額は約 650 億円と非常に低い水準にとどまっており、市場はまだ初期段階にあることを示している。

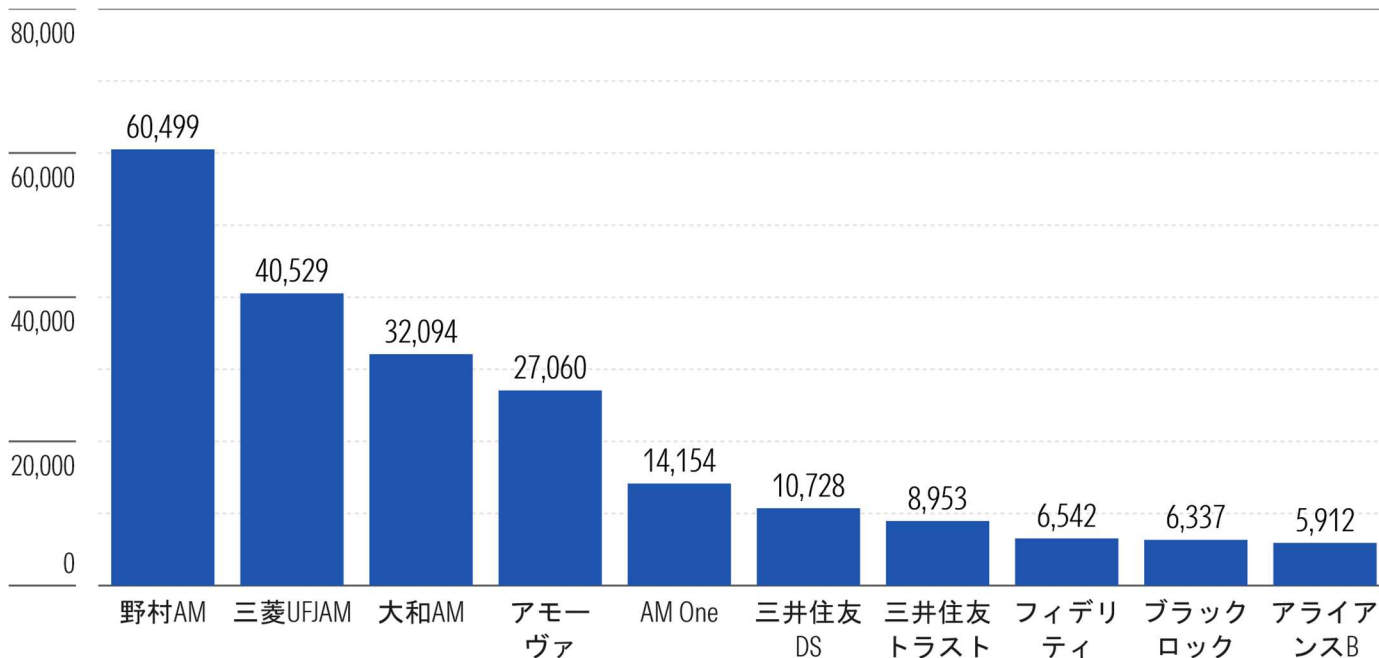
このように変化する環境の中で、モーニングスターの運用会社評価は、変化の時期を通じて妥当性を保つ恒久的な要因を重視し続けている。運用会社が運用人材を採用し、育成し、定着させる力は極めて重要であり、キーパーソン・リスクや後継者計画に関する取り組みも重要である。しかし、日本のファンド市場では一般的にこのような情報の開示は限定的であり、投資家と資産運用会社の間に情報格差が生じている可能性がある。この情報格差は、特にアクティブ・ファンドにおける投資家の信頼を損なう可能性がある。また、運用者に関する情報に加え、モーニングスターのアナリストは、ファンドの設定や償還を含む運用会社のファンド・ラインアップ、商品開発に対する取り組み方などを評価し、長期的な視点で投資家重視の姿勢を保っているかを確認している。運用者に対する報酬体系も重要な評価事項である。さらに、リスク調整後リターンの成功率（カテゴリ内で上位半分に位置するか）、および資産運用会社の各ファンドに対するモーニングスター・アナリストの定性評価の分布なども、運用会社評価にて考慮している。本レポートは、包括的な運用会社評価を提供するため、ファクトシートにてこれらの指標を表示する。

上位ランキング

野村アセットが残高首位

日本のファンド業界における公募追加型投資信託とETFの運用資産残高上位60社に焦点を当てると、野村アセットが60.5兆円の運用資産残高を有し首位となった。そのうち約80%がパッシブ運用によるものである。この高いパッシブ戦略の比率は、次いで残高が大きい3社の資産運用会社、三菱UFJアセット、大和アセット、アモーヴァ・アセットも同様に、各社の運用資産の70~80%がパッシブ運用となっている。

図表1 運用資産残高上位10社（単位: 10 億円）



出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託（ETF）を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

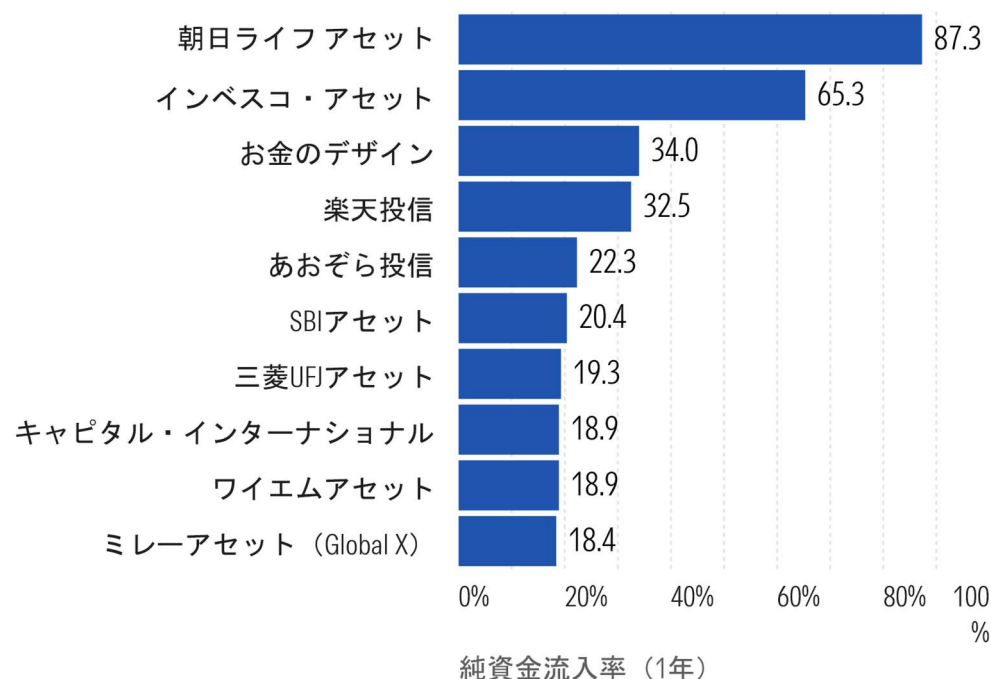
パッシブ運用の比率が高まった主な要因は、日銀による大規模なETF購入である。日銀が金融緩和政策の一環で、市場中立性を確保するために市場を代表する指数に連動する運用を行うETFを、2010年代から2020年代初頭にかけて購入した。2025年9月時点で、日銀はETF市場の大部分を占める80兆円超の日本株ETFを保有しており、上述の運用会社におけるパッシブ運用の比率を高める結果となっている。なお、日銀による買い入れが上位4社などの一部に集中しているのは、日銀の巨額の購入に対応できる十分な運用資産残高と流動性を備えたETFを提供していた運用会社が限られていたためである。

日本の大手金融機関グループ傘下の資産運用会社はすべて上位 10 社以内にランクインしている。外資系資産運用会社がこれらの日系運用会社と同規模の運用資産残高を獲得することは容易ではない。これは、大手日系運用会社が同グループ内に強固な販売網を有している一方、外資系運用会社にはそのような国内販売網へのアクセスが限られているためである。

新 NISA が純資金流入率を牽引

過去 1 年間では、朝日ライフアセットが 87%と最も高い純資金流入率を記録した。これは主に、WCM インベストメント・マネジメントが外部委託運用先となる同社のアクティブ・ファンドの 1 本に、920 億円の純資金流入があったことによるものである。米国に本社を置くインベスコは、同社のグローバル株式の旗艦ファンドである「インベスコ 世界厳選株式オープン<為替ヘッジなし>（毎月決算型）」が分配金需要を持つ個人投資家を引き続き惹きつけており、純資金流入率で 2 位となった。10 年の歴史を持つ新興の運用会社であるお金のデザインが 3 位となった。同社はロボアドバイザー運用で知られている。運用残高上位 10 社の中では、三菱 UFJ アセットが 19%と堅調な成長率を記録しており、これは主に新 NISA を通じた運用費用の低いインデックス・ファンドへの資金流入によるものである。

図表 2 純資金流入率上位 10 社（過去 1 年）

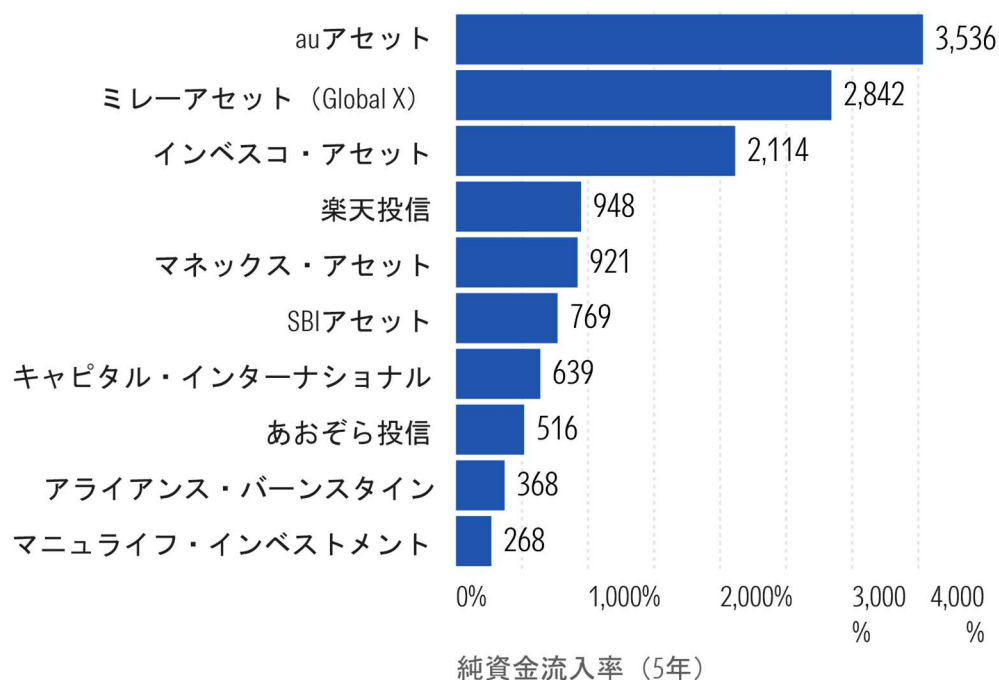


出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託 (ETF) を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

過去 5 年の期間で見ると、au アセット、ミレーアセット（日本では Global X ブランドで展開）、楽天投信、SBI アセットなど、運用費用の低いインデックス・ファンドに注力する運用会社が、新 NISA の好影響を受けて大きく成長した。外資系資産運用会社も力強い勢いを示しており、5 社が純資金流入率の上位 10 社にランクインしている。米国市場でも大手運用会社であるキャピタル・グループとインベスコは、日本で継続的に資産を集めている。キャピタル・グループは、5 年前の運用資産残高に

対し、5年累計の純資金流入額率は約7倍、インベスコは22倍以上と、それぞれ大きく資金を集めた。

図表 3 純資金流入率上位 10 社（過去 5 年）



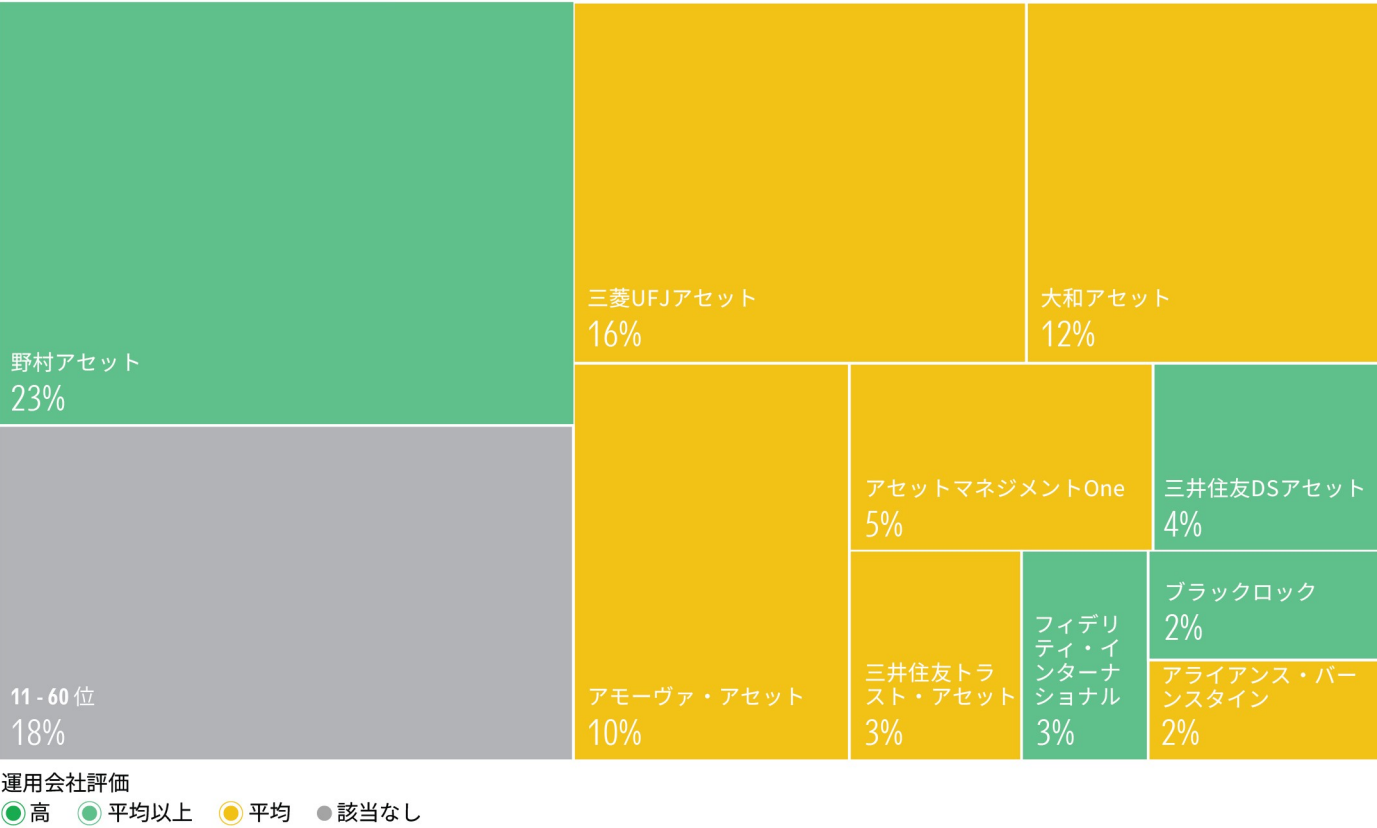
出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託 (ETF) を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

日本のファンド市場における高い市場集中度

日本のファンド市場における集中度は高く、一部の大手運用会社が運用資産残高の大部分を占めている。野村アセットが市場全体の運用資産残高の 23% を有し首位となり、三菱 UFJ アセットと大和アセットが続いている。上位 3 社を合わせると市場全体の半分強の運用資産残高を有しており、その影響力の大きさを示している。この集中度の水準は、バンガード、ブラックロック、フィデリティの 3 社が合わせて総運用資産残高の約 50% を占める米国市場と類似している¹。

¹ "Fund Family Digest: US in 2025", <https://www.morningstar.com/business/insights/research/fund-family-150>

図表 4 市場集中度



出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託（ETF）を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

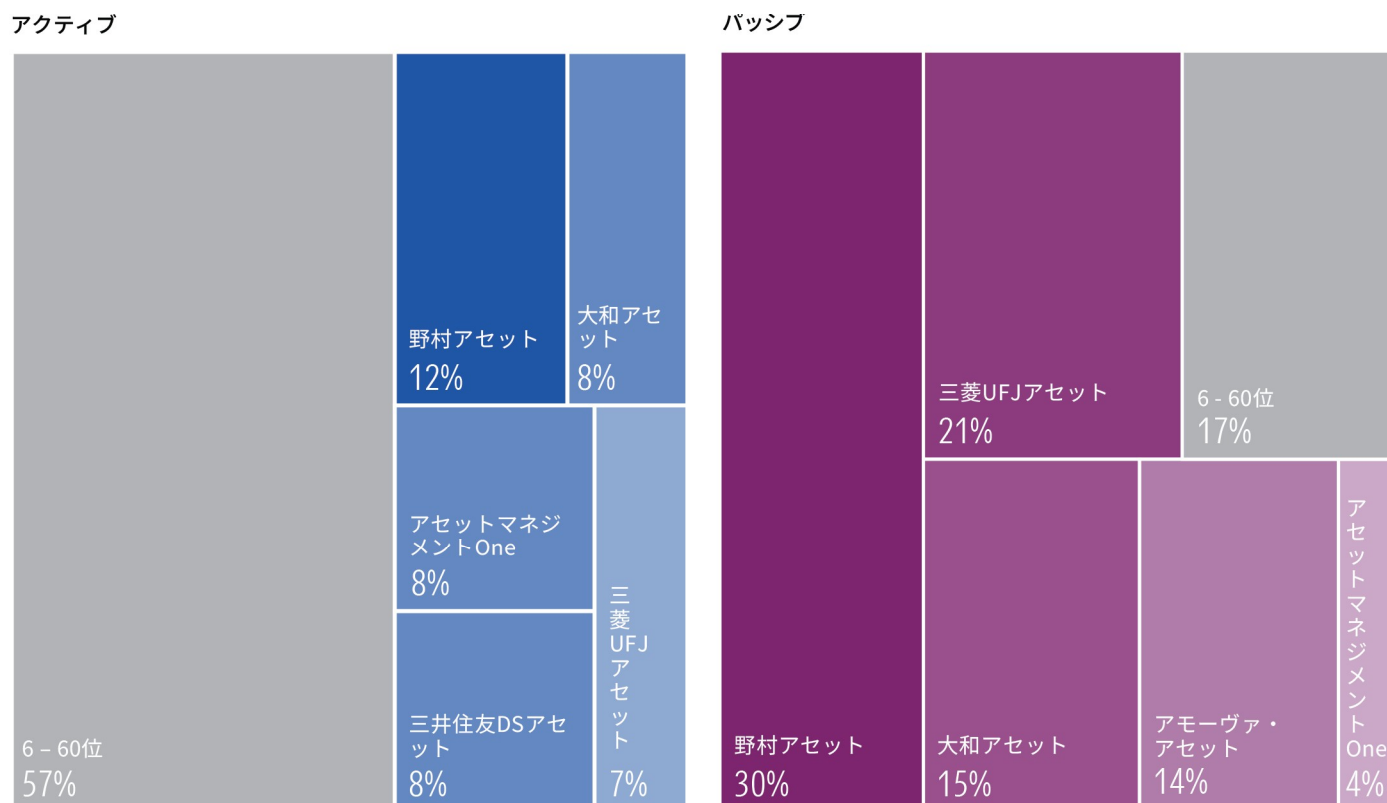
パッシブ運用では集中度がさらに顕著であり、上位 3 社で市場全体のパッシブ運用資産の約 76%を占めている。日本のパッシブ運用における独特な側面は、前述の通り日銀による ETF 購入である。日銀による大規模な ETF 購入は、野村アセット、大和アセット、アモーヴァ・アセットなど大手運用会社の運用資産残高を大幅に押し上げた。その結果、これらの運用会社は合わせてパッシブ運用資産の約 80%を運用しており、野村アセット単独でもパッシブ運用資産の 30%を占めている。この状況は米国とは異なるものである。米国では、パッシブ運用はバンガードやブラックロックなど少数の大手プレーヤーによって支配されており、両社で合わせてパッシブ運用資産残高の約 66%を有しているが、日本のような中央銀行による直接的な関与はない。三菱 UFJ アセットのパッシブ運用残高は米国の大手運用会社により近く、その成長は日銀による ETF 購入だけでなく、近年、新 NISA により注目を集めている eMAXIS Slim シリーズを通じた個人投資家からの資金流入によっても大きく後押されている。なお、日本や米国とは異なり、欧州・中東・アフリカ（EMEA）地域のパッシブ運用資産残高はより幅広い運用会社に分散している²。

アクティブ運用に目を向けると、日本市場は比較的分散度が高い。上位 5 社がアクティブ運用資産残高の 43%を占めており、上位 5 社が 46%を保有する米国と近い水準である。一方、EMEA 地域では、アクティブ運用の残高は多岐にわたる運用会社に分散されており、アクティブ運用資産残高に占める上位 5 社の割合は 20%に留まる。

2 "Fund Family Digest: Europe in 2025", <https://www.morningstar.com/business/insights/research/emea-fund-family-100>

日本のアクティブ運用は EMEA 地域よりも集中度が高いが、パッシブ運用と比較すると、より多くの運用会社にとって競争機会が存在することを示している。

図表 5 市場集中度: アクティブ・パッシブ別



出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投資信託と上場投資信託 (ETF) を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

ETF 市場

日本では引き続き公募追加型投資信託のファンド本数が ETF の本数を上回っているものの、世界的な流れでは運用会社は公募投信よりも速いペースで新たな ETF を設定している。日本では、日銀による ETF 購入が ETF 市場の成長を大きく後押ししたことで、ETF 市場は重要な市場となった。日銀は 2023 年以降、ETF の新規購入を停止したが、過去に購入した ETF の保有残高は依然として多額であり、日銀が ETF 市場に与える影響力は引き続き大きい。

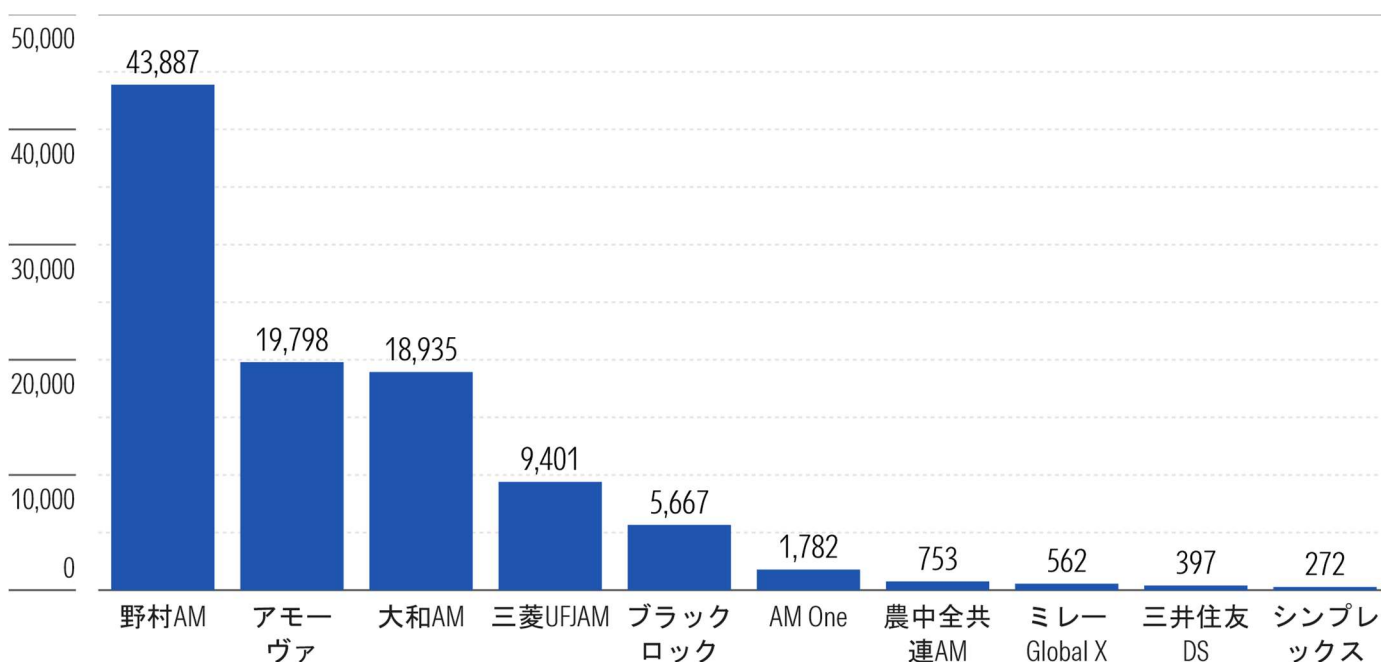
日本の ETF 市場は高度に集中しており、上位 10 運用会社間でも運用資産残高に顕著な格差がある。業界首位の野村アセットは 43.9 兆円の ETF 運用資産残高を有しており、これは同社の総運用資産残高の約 72% を占める。一方、同社の主要競合他社であるアモーヴァ・アセットと大和アセットも残高は大きく、それぞれ約 19 兆円、18 兆円の ETF 運用資産残高を有している。対照的に、農林中金全共連アセットやシンプレクス・アセットなどの小規模な運用会社は、ETF の運用資産残高はさほど大きくない。

構造的に、日本の ETF 市場は日経 225 や TOPIX など、広範な市場を対象とした指数に連動するファンドが中心となっている。これらは、大手の運用会社が規模の経済を

活用して、小規模運用会社が容易に実現できない低い運用費用を設定し、投資家の資金を集めてきた。なお、上位運用会社が運用する ETF の大部分はパッシブ運用である。例えば、野村アセットとアモーヴァ・アセットの両社におけるパッシブ運用資産の大部分は ETF によるものである。

繰り返しとなるが、野村アセット、三菱 UFJ アセット、大和アセット、アモーヴァ・アセットなどの運用会社への ETF 資産の集中は、主に過去 10 年間の日銀による ETF 購入に起因している。日銀は ETF の最大の購入者となり、大手資産運用会社の運用資産残高の大幅な成長を促進した。また、近年では、日系資産運用会社は、運用費用の低いパッシブ運用に対する個人投資家の需要の高まりに対応する機会をますます求めている。

図表 6 ETF 運用資産残高上位 10 社 (単位: 10 億円)



出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、上場投資信託 (ETF) を対象。

ファンド・ラインアップの集中度

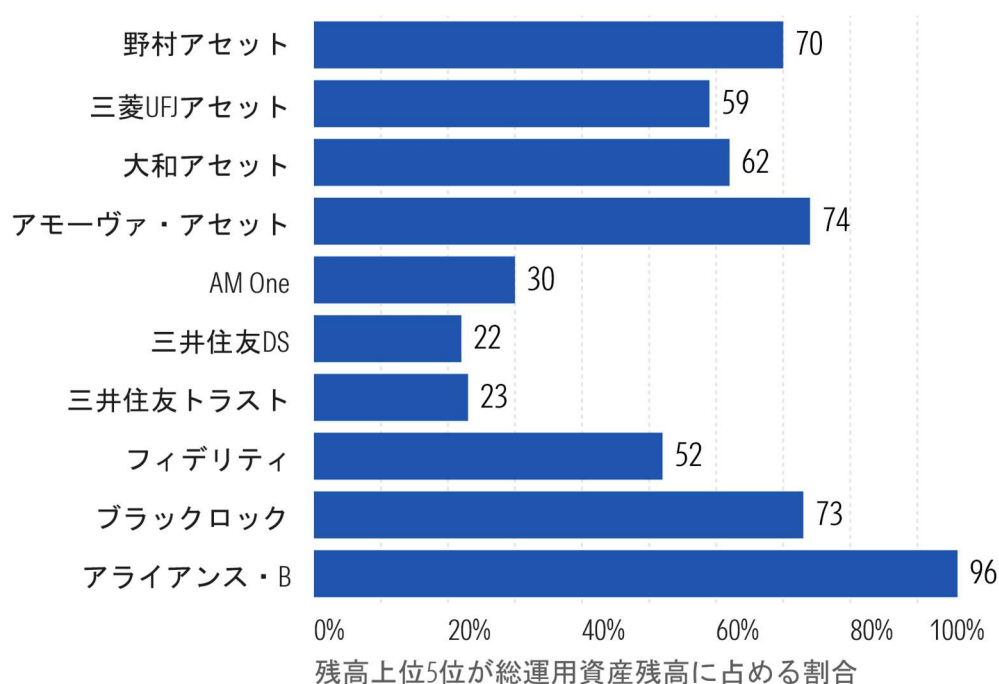
日本の運用資産残高上位 10 社の大半は、特定のファンドへ運用資産残高が集中している。上位 10 社のうち 7 社では、運用資産残高の 50% 超が 5 ファンド（もしくは 5 ファンド以内）に集中している。日銀が保有する ETF を運用する運用会社は総じて、残高上位 5 ファンドが総運用資産残高に占める割合は 50% を超えている。例えば、野村アセットは業界最多となる 650 本超のファンドを提供しているにもかかわらず、運用資産残高の約 70% が 5 ファンドに集中しており、そのうち 3 本は ETF である。

米国に本社を置くアライアンス・バーンスタインは、日本においてさらに高い集中度を示しており、同社の日本籍ファンド 37 本のうち、残高上位 5 ファンドに、運用資産残高の 96% が集中している。この 5 本はすべて同じアクティブ運用の米国成長株戦略に従っている。対照的に、アセットマネジメント One、三井住友 DS アセッ

ト、三井住友トラスト・アセットの集中度は 22% から 30% と低い。それでも相当な水準ではあるが、これらの運用会社はファンド全体により均衡の取れた運用資産残高の配分を行っている。

なお、米国と比較すると、米国では上位ファンドへの集中度は日本よりは一般的に低く、より分散している。米国の運用資産残高上位 3 社であるバンガード、ブラックロック、フィデリティにおいて、残高上位 5 ファンドが総運用資産残高に占める割合は、それぞれ 44%、28%、29% である。

図表 7 残高上位 10 社における上位 5 ファンドへの集中度

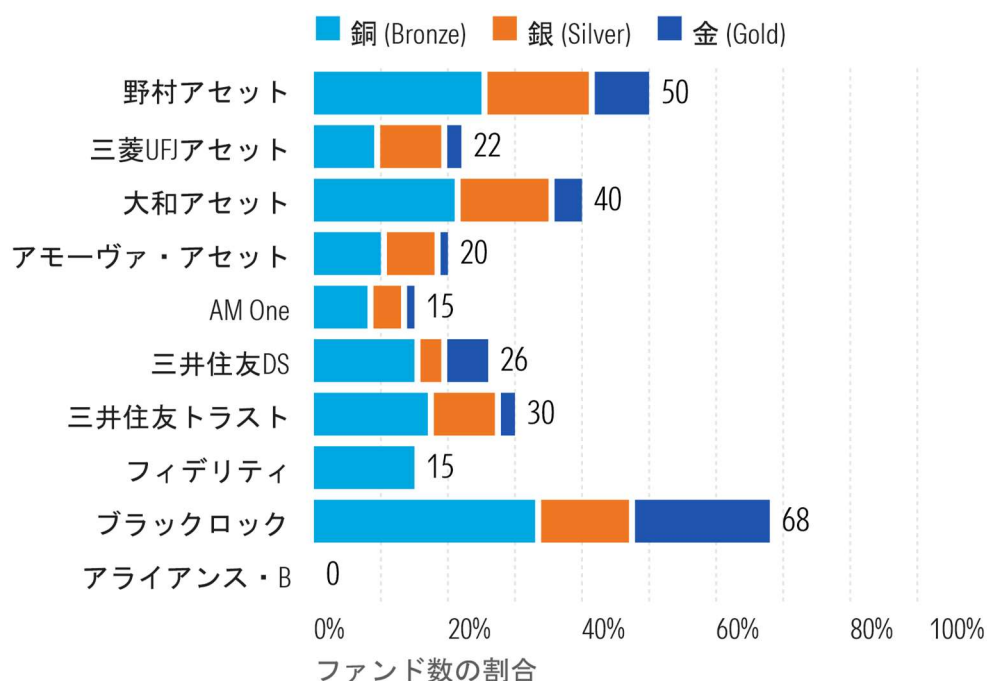


出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託 (ETF) を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

低い運用費用がブラックロックの高評価を後押し

モーニングスターでは、アナリストによるファンド評価とアルゴリズムによるプロセスを通じて、各種ファンド、ETF、およびその他の運用商品に対し、将来見通しを勘案した評価である、モーニングスター・メダリスト・レーティングを付与している。ファンドは、金 (Gold)、銀 (Silver)、銅 (Bronze)、中位 (Neutral)、下位 (Negative) の 5 段階で評価される。図表 8 は、各運用会社のファンドのうち、メダリスト・レーティングで高い評価 (金、銀、銅) を獲得しているファンドの割合を示している。

図表 8 残高上位 10 社におけるメダリスト・レーティングの金、銀、銅ファンドの割合



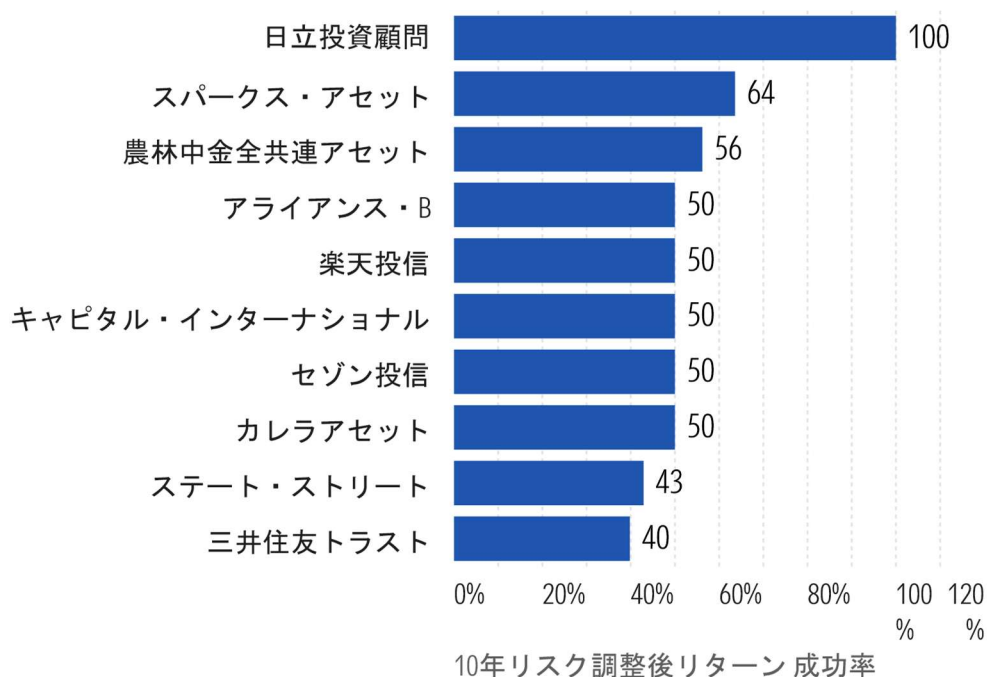
日本の運用残高上位 10 社の平均では、約 30%のファンドがモーニングスター・メダリスト・レーティングで高評価（金、銀、銅）を獲得している。これは注目に値し、本レポートで対象とした 60 社全体の平均である 21%よりも高い数値である。ブラックロックは上位 10 社の中で最も高い割合のファンドが高評価を獲得している。同社は世界的な iShares ブランドを展開し、世界規模の運用による効率性を背景に、低い運用費用の商品を提供していることが背景にある。なお、運用費用とメダリスト・レーティングの関係は、日本、米国、EMEA 地域で一貫しており、運用費用の低いパッシブ運用をより多く提供する運用会社ほど、より高いメダリスト・レーティングを獲得する傾向にある。これは、運用費用がメダリスト・レーティングの評価手法において重要な要素であり、各ファンドのレーティングに大きな影響を与えるためである。

日本において主にアクティブ株式戦略に注力する運用会社、例えば米国拠点のキャピタル・グループや独立系運用会社のコモンス投信などは、平均以上の運用会社評価を獲得しており、これは調査の深さと規律ある投資文化を反映している。これらの運用会社は残高上位 10 社に含まれず図表 8 には表示されていないが、高い運用会社評価は質の高さを示す先行指標となる。これらの運用会社は通常、高いアルファ創出の可能性を持つ戦略を提供し、高いメダリスト・レーティングを獲得している。特筆すべきは、高い評価を受けているキャピタル・グループが、魅力的なファンド・ラインアップ、投資家重視の姿勢、および優れた運用能力により、2025 年の日本のモーニングスター・アワードにて最優秀運用会社賞を受賞したことである。同社の日本におけるファンドの 4 分の 3 以上は、高いメダリスト・レーティングを獲得している。

ファンド・ラインアップの絞り込みが成功率を向上

本レポートにおける運用会社の成功率は、計測期間中において償還されることなく存続し、かつリスク調整後リターンがモーニングスター・カテゴリの中央値を上回った（カテゴリ内で上位半分以上の）ファンドの割合である。投資家にとってはパフォーマンスだけでなく、ファンドが長期にわたって存続することも重要であり、この指標はファンドの償還や併合により低下する。成功率はファンド・レベルで算出後、運用会社レベルに集計される。

図表 9 リスク調整後リターンの成功率上位 10 社



出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託（ETF）を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

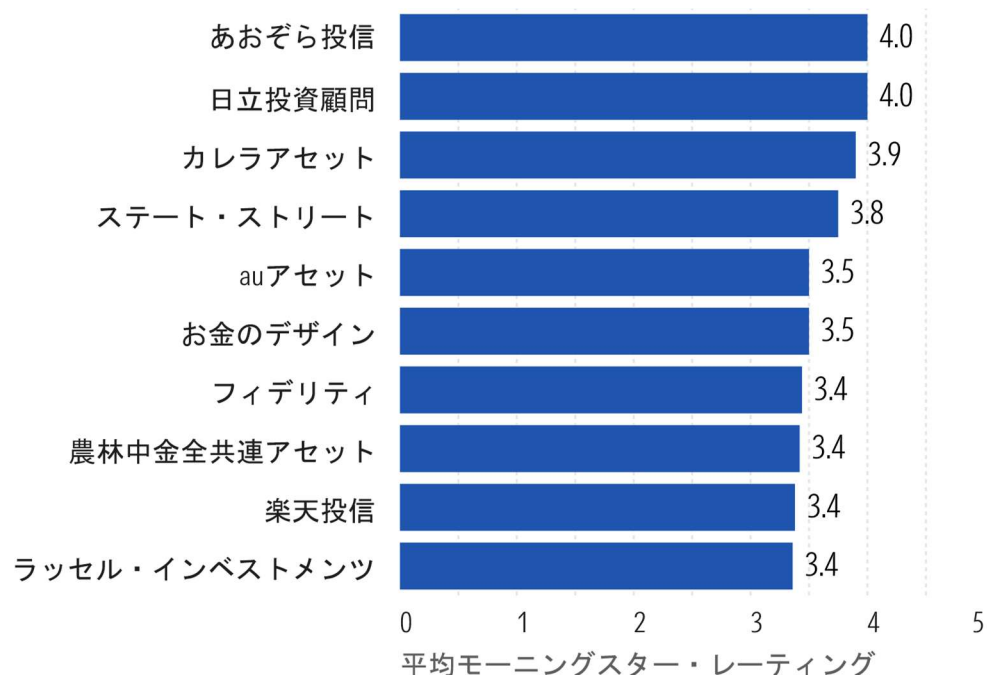
高い成功率を残すためには、資産運用会社はファンドの新規設定と償還を頻繁に行うことを避けなければならない。一時的に人気のテーマのファンドを新規設定し、数年後に償還するような運用会社は、会社全体の成功率が低下する。楽天投信と三井住友トラスト・アセットを除き、上記で取り上げた運用会社はそれぞれ 50 本未満のファンド・ラインアップとなっている。これは、ラインアップを絞り込むことによる優位性を示している。米国においては、成功率の高い運用会社上位 10 社は、概ね 25 本未満という絞り込まれたファンド・ラインアップとなっており、日本の運用会社と比較してさらに少ない本数となっている。

最大手運用会社の中でフィデリティがモーニングスター・レーティングで首位

成功率はファンドの運用実績を測る重要な指標であるが、単にカテゴリ内で上位半分以上の実績を残すだけでなく、運用費用控除後にリスクを調整した上で、可能な限りカテゴリの中央値を大きく上回ることを投資家は望んでいるだろう。モーニングスター・レーティングはこれを測るうえで重要な指標である。このレーティングは 1 つ星から 5 つ星の範囲で評価され、モーニングスター・カテゴリ内のファンドと比較して、運用費用控除後かつリスク調整後ベースで、ファンドがどの程度優れ

たパフォーマンスを示したかを示している。この指標は最低3年間のリターンに基づき算出され、ファンドの運用期間が長期化するにつれて、5年および10年の実績を重みづけする。

図表 10 平均モーニングスター・レーティング上位 10 社



出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託 (ETF) を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

市場全体で見ると、主に運用費用の低いインデックス・ファンドを提供する運用会社が、スター・レーティングの平均は高くなる傾向にある。これは、運用費用が長期的な運用実績と密接な関係にあることを示すモーニングスターのグローバル調査と一致している。パッシブ運用をメインとする運用会社にとって、低い運用費用の商品は、カテゴリ内で優れた実績を達成するための大きな優位性となる。その結果、平均スター・レーティングが他社より高くなる傾向が見られる。一方、フィデリティのように、厳選された優れたパフォーマンスを持つ運用戦略に注力する運用会社も、高い評価を達成している。さらに別の例としてあおぞら投信が挙げられる。同社のスター・レーティングの平均は 4.0 であり、上位のパフォーマンスを示している。これは、同社の運用資産の大部分が米国ディメンショナルとの提携を通じて運用されており、ディメンショナルの体系的でルールに基づくアクティブ運用戦略が、安定したリスク調整後リターンを提供してきたことによるものである。

2025 年日本における運用資産残高上位 60 社

図表 11 は、日本における運用資産残高上位 60 社の資産運用会社のリストである。モーニングスターのアナリストは国内外で、このうち 31 社を運用会社グループ・レベルで評価している。アナリストが評価する運用会社については、本レポートの一部として、モーニングスター運用会社ファクトシートが作成されている。アナリスト評価対象外の 28 社の運用会社は、アルゴリズムにより算出された運用会社評価が付与されており、これらは「Q」で示されている。残りの 1 社についても、モーニングスター・メダリスト・レーティングの付与対象となるファンドがなかったため、運用会社評価の対象外となった。

図表 11 日本の資産運用会社 60 社（残高 1-30 位）

運用会社	運用会社評価	運用資産残高 (単位: 10 億円)	メダリスト ファンド数 %	モーニングスター・ レーティング平均
野村アセット	平均以上	60,499	50	3.2
三菱 UFJ アセット	平均	40,529	22	3.1
大和アセット	平均	32,094	39	3.2
アモーヴァ・アセット	平均	27,060	19	3.1
アセットマネジメント One	平均	14,154	15	2.9
三井住友 DS アセット	平均以上	10,728	25	3.1
三井住友トラスト・アセット	平均	8,953	30	3.3
フィデリティ・インターナショナル	平均以上	6,542	15	3.4
ブラックロック	平均以上	6,337	68	2.9
アライアンス・パースタイン	平均	5,912	0	3.1
楽天投信	平均以上 Q	4,983	31	3.4
ニッセイアセット	平均 Q	4,620	20	3.0
SBI アセット	平均以上 Q	4,424	39	2.9
インベスコ・アセット	平均	3,696	23	3.3
ゴールドマン・サックス・アセット	平均	3,007	6	3.0
ピクテ	平均以上	2,916	4	2.9
キャピタル・インターナショナル	高	2,908	81	3.1
りそなアセット	高 Q	1,780	46	3.3
東京海上アセット	平均 Q	1,600	7	2.6
ティー・ロウ・プライス	高	1,550	50	2.4
レオス・キャピタルワークス	平均	1,304	0	2.0
SBI 岡三アセット	平均 Q	1,263	3	2.8
農林中金全共連アセット	高 Q	1,105	54	3.4
セゾン投信	平均 Q	988	0	2.7
J.P.モルガン・アセット	平均以上	868	39	3.3
アムンディ	平均	827	6	3.1
イーストスプリング・インベストメンツ	平均	783	0	3.2
HSBC アセット	平均	692	5	2.4
ミレーアセット (Global X)	平均	562	62	2.2
いちよしアセット	平均以下 Q	561	0	2.6

出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託 (ETF) を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

図表 11 日本の資産運用会社 60 社（残高 31-60 位）

運用会社	運用会社 評価	運用資産残高 (単位: 10 億円)	メダリスト ファンド数 %	モーニングスター・ レーティング平均
しんきんアセット	平均以下 Q	556	17	2.5
あおぞら投信	平均 Q	542	0	4.0
スパークス・アセット	高	513	15	3.3
明治安田アセット	低 Q	506	0	2.8
SOMPO アセット	低 Q	473	0	2.7
JP 投信	平均以上 Q	466	43	3.1
さわかみ投信	平均以下 Q	431	0	1.0
フランクリン・テンプルトン	平均	399	0	2.7
ステート・ストリート	平均以上	376	78	3.8
朝日ライフアセット	低 Q	354	0	2.6
シンプレックス・アセット	平均 Q	309	11	2.3
UBS アセット	平均	309	30	2.9
日立投資顧問	平均以上 Q	252	100	4.0
ドイチェ・アセット	平均 Q	194	0	3.2
パインブリッジ・インベストメンツ	平均	191	5	2.8
BNY メロン・インベストメント	平均	184	20	2.9
マニュライフ・インベストメント	平均以上	175	22	2.9
マネックス・アセット	平均 Q	157	0	3.2
シュローダー・インベストメント	平均以上	151	17	2.7
スカイオーシャン・アセット	平均 Q	130	0	2.6
au アセット	平均 Q	110	11	3.5
ラッセル・インベストメンツ	平均	103	0	3.4
T&D アセット	平均以下 Q	97	0	3.0
コモンズ投信	平均以上	89	100	2.3
カレラアセット	平均以下 Q	86	0	3.9
ちばぎんアセット	平均以下 Q	76	0	2.3
お金のデザイン	平均以上 Q	72	38	3.5
キャピタル・アセット	平均 Q	54	0	1.5
ワイエムアセット	平均以下 Q	52	0	2.5
鎌倉投信		47		

出所: Morningstar Research. 2025 年 9 月 30 日時点、日本籍公募追加型投信と上場投資信託（ETF）を対象、短期金融資産のみのファンドは除いている。

次ページ以降はモーニングスター運用会社ファクトシートである。■■■

野村アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

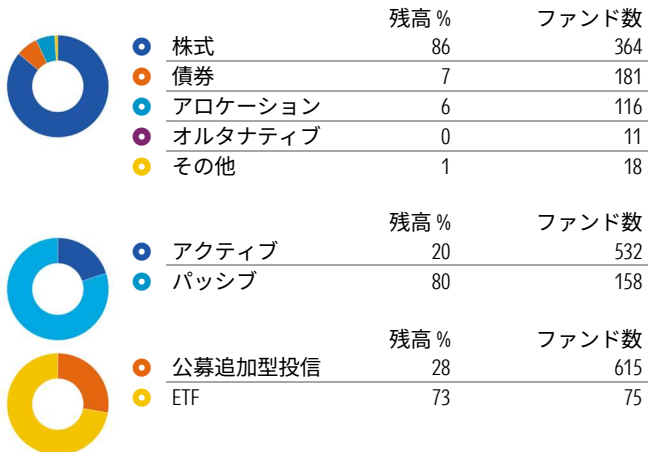
運用会社評価	平均以上	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額			純資金流入率		
					運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
		12/6/2024	橋本 直子		60,499	1 /60	39.2	20 /60	0.1	37 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

野村アセットは、2021 年 4 月以降、小池 CEO の下、プロダクト・ガバナンスと投資家重視の取り組みにおいて著しい進歩を遂げている。同 CEO 下での前向きな進展を評価し、同社の運用会社の評価を「平均以上」とする。同社の投資家利益へのコミットメントは、ファンド・レビュー・レポートの公表からも明確である。同レポートでは自社ファンドを運用実績、商品性（運用費用等）、情報提供の 3 つの観点から総合的に評価し、結果の公表と共に改善策を講じている。より透明性を高めるための取り組みとしては、代表的な運用戦略を中心とした運用者に関する情報の開示が挙げられる。同社の姿勢は、ファンドの質を重視し、2030 年までに満期償還を中心に取り扱いファンド数を半減する方針を掲げている点にも表れている。なお、同社はポートフォリオ・マネジャーに、最長 5 年の計測期間のファンド・パフォーマンスに連動した報酬体系を採用している。この仕組みは、投資家利益との一致を図り、商品の質を高めることに役立っている。

同社は日本に大きな運用チームを有し、グローバル株式チームの拡充を図るなど、自社（インハウス）の運用力強化に注力している。同社の専門性を超える資産クラスについては、外部のサブアドバイザーを活用している。社内外の能力を用いることで、顧客のあらゆる需要に応えられるよう努めている。なお、多様なラインナップは投資家にとって最適とは言えないケースもあるが、同社は長年にわたり良好な運用成果をあげており、同社全体の 5 年および 10 年間のサクセス・レシオ（カテゴリ平均を上回ったファンドの割合）は、概ね 50-60% で推移している。モーニングスターでは、このような変化をポジティブに捉える一方で、経営陣の交代とファンド本数半減の実行は注視すべきと考えている。これらの潜在的な課題へうまく対処できるかどうか、投資家目線の取り組みを継続する上で今後重要な要素となるであろう。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	70	32 /60

	残高 (10 億円)
NEXT FUNDS TOPIX 連動型上場投信	26,690
NEXT FUNDS 日経 225 連動型上場投信	12,164
NEXT FUNDS JPX 日経 400 連動型上場投信	1,861
野村外国株式 IF・MSCI-KOKUSAI(DC 向け)	1,077
のむラップ・ファンド(普通型)	626

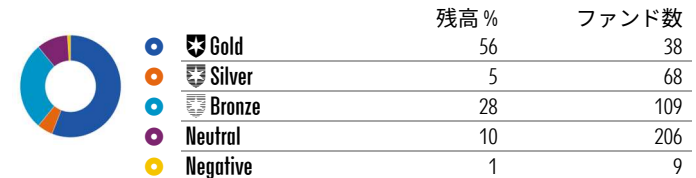
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	2 /25 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	7 /45 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	4 /15 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	6 /36 /60
投信: 平均運用期間 (年)	13.9
ETF: 平均運用期間 (年)	11.1

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	25	17 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



	%	順位
残高 - 金、銀、銅ファンド	89	6 /60
本数 - 金、銀、銅ファンド	50	8 /60

パフォーマンス

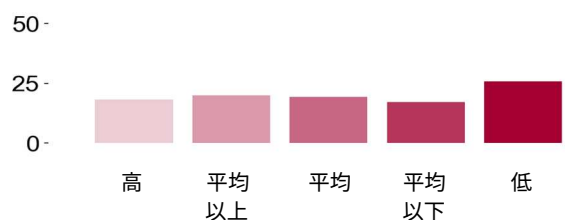
モーニングスター・レーティング平均	3.2	順位
		16 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	47	23 /60
成功率 (5 年)	44	18 /60
成功率 (10 年)	41	10 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	48	順位
		23 /60



三菱 UFJ アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均	純資金流入額			純資金流出率			
評価日	10/1/2024	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位	
アナリスト	橋本 直子	日本	40,529	2 /60	5578.4	1 /60	19.3	7 /60

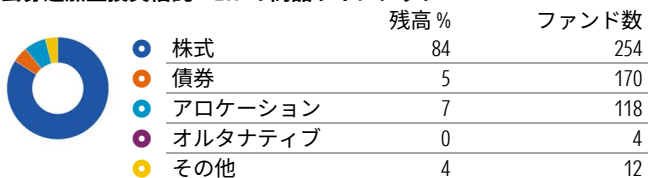
モーニングスター運用会社分析コメント

三菱 UFJ アセット (MUAM) は、高い競争力を持つインデックス・ファンドのラインアップを構築し、コーポレート・ガバナンスとプロダクト・ガバナンスの面で進展を遂げてきた。もっとも同社の変革は現在進行中であり、インデックス・ファンド以外の分野における専門性にはまだ発展途上の部分も見受けられるため、同社の運用会社の評価を「平均」とする。

MUAM は三菱 UFJ フィナンシャル・グループの完全子会社である。2024 年 4 月に三菱 UFJ 信託銀行の子会社から三菱 UFJ フィナンシャル・グループへ移行し、経営の独立性とコーポレート・ガバナンスを強化した。具体的な成果には社外取締役で構成されるプロダクト・ガバナンス等に関する諮問委員会を設置し、これまで以上に監督的な視点を強めることで、経営の透明性を向上させることが含まれる。CEO の横川氏は、三菱 UFJ 信託銀行での長年の資産運用ビジネスの経験を活かし、2021 年より MUAM を率いている。横川氏のリーダーシップのもと、MUAM は運用担当者の報酬体系の見直しやパフォーマンスの低いファンドへの取組など、着実に成果を上げている。

同社はインデックス・ファンドでの大きな成功を通じ、グループ外での市場シェアと運用資産を拡大し、その結果資金フローの安定性が増している。横川氏は MUAM をマルチ・ブティック型の総合的な運用会社とする理想像を描いているが、現在のアクティブ運用力を踏まえると、この理想像とはまだ差があるとモーニングスターでは考えている。同社は運用人材を拡充し、運用担当者の裁量権を拡大する仕組みを導入することでインハウスの運用力とファンドのラインアップの強化を進めている。全体像は明らかだが、こうした変革の効果が完全に表れるには一定の時間が必要とされるだろう。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	59	41 /60

	残高 (10 億円)
eMAXIS Slim 米国株式(S&P500)	8,586
eMAXIS S 全世界株式(オール・カントリー)	7,586
MAXIS トピックス上場投信	3,801
MAXIS 日経 225 上場投信	2,800
eMAXIS S 先進国株式インデックス(除く日本)	1,038

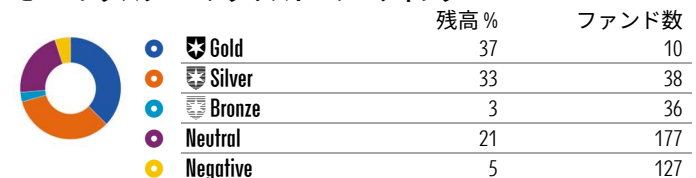
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	4 /29
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	7 /44
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	3 /14
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	7 /44
投信: 平均運用期間 (年)	14.1
ETF: 平均運用期間 (年)	7.4

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	23	22 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



	%	順位
残高 - 金, 銀, 銅ファンド	73	11 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	22	21 /60

パフォーマンス

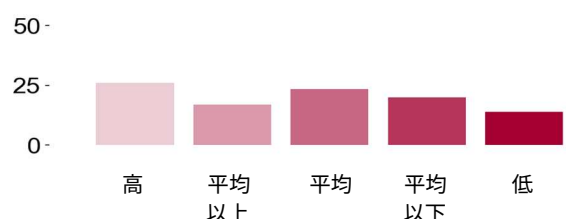
モーニングスター・レーティング平均	3.1	順位
		24 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	43	27 /60
成功率 (5 年)	36	27 /60
成功率 (10 年)	25	25 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	55	順位
		37 /60



大和アセット

		ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)						
運用会社評価	平均				純資金流出入額		純資金流出入率	
評価日	3/11/2025	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位	
アナリスト	Morningstar Manager Research	日本	32,094	3 / 60	733.5	6 / 60	2.7	31 / 60

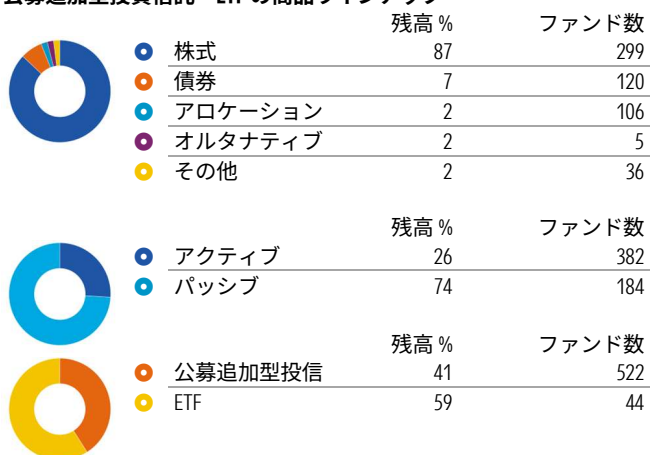
モーニングスター運用会社分析コメント

大和アセットは、大和証券グループ傘下の大手資産運用会社である。残高の大きいインデックス・ファンドにおける運用費用における競争力を誇る一方で、アクティブ・ファンドの運用力強化は途上にある。同社はこれまで経営陣や運用チーム内での入れ替わりが比較的多く、2025年4月からは新社長の佐野氏が就任する。新体制下での経営陣と運用体制の安定性は引き続き注視すべきであり、同社の運用会社評価を「平均」とする。

同社は2024年12月時点で約33兆円の運用資産残高を有しており、確固たる歴史と、規模のメリットと強力な販売ネットワークを誇る。歴史的に、同社の強みはリテール・ビジネスに偏っていたが、2024年5月に発表された、かんぽ生命保険との資本業務提携を通じ、機関投資家および海外事業の強化を今後目指す。アクティブ運用戦略においては、日本株式や債券は自社の専門知識を活用し社内にて運用する一方、海外の資産クラスについては、専門的な運用ノウハウを持つ外部委託先と適切に提携している。また、ETFにも大きなプレゼンスを持ち、残高の大きいパッシブ戦略の運用費用には競争力がある。一方で長期的な資産形成という観点から見ると、同社のラインアップには疑問の余地がある商品も含まれている。

小松前社長、および金森 CIO のもと、同社は報酬水準の引き上げや、より組織的な運用アプローチを導入し運用を高度化するなど、注目すべき取り組みを行ってきた。しかし、経営陣の入れ替わりが引き続きあることは、これらの取り組みが今後も継続するか疑問を投げかけている。小松氏の退任と、佐野氏の新社長就任は 3 年ごとに経営陣が交代する従来の慣例に沿ったものである。また、チームの改編に加え、運用チーム内の人員の入れ替わりも過去においては高かったことを踏まえ、人材が今後も定着するかを見極める余地があるとモーニングスターでは考える。新体制のもとで、同社の運用戦略のパフォーマンスと、会社の方向性を引き続き注視する。

公募追加型投資信託・ETFの商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 % 62	順位 40 / 60
-------------	------------	---------------

	残高 (10 億円)
iFreeETF TOPIX(年 1 回決算型)	12,105
iFreeETF 日経 225(年 1 回決算型)	5,437
ダイワファンドラップ 日本株式セレクト	884
iFreeNEXT FANG+インデックス	837
ダイワファンドラップ 日本債券セレクト	727

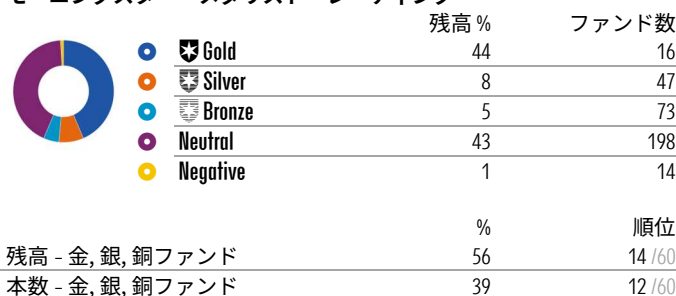
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	34 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	48 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	26 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	42 /60
投信: 平均運用期間(年)	11.8
ETF: 平均運用期間(年)	6.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	32	11 / 60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

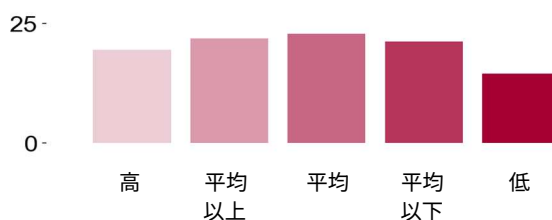
モーニングスター・レーティング平均	3.2	順位 18 / 60
-------------------	-----	---------------



	%	順位
成功率(3年)	46	24 /60
成功率(5年)	39	24 /60
成功率(10年)	22	30 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	52	順位 33 / 60
------------------	----	---------------



アモーヴァ・アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価		平均	純資金流入額			純資金流出率		
評価日	4/24/2025		運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
アナリスト	Morningstar Manager Research	日本	27,060	4 /60	-780.3	60 /60	-3.3	41 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

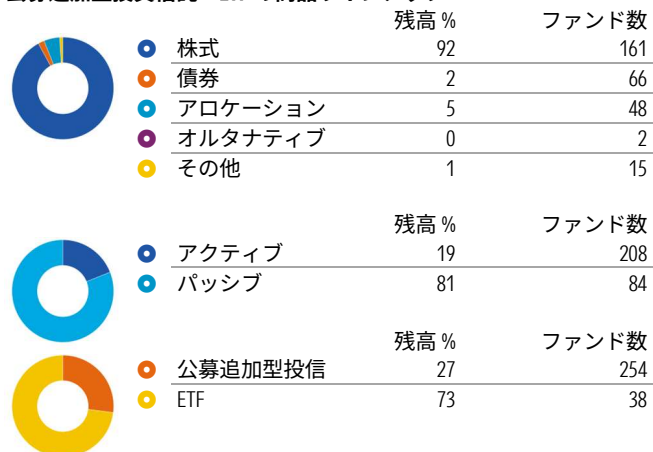
グローバルな野心を持つ運用会社であるアモーヴァ・アセット（旧日興 AM）に「平均」の評価を付与する。

同社は三井住友トラスト HD の傘下にあり、日本最大級の資産運用会社である。CEO のドゥルーズ氏は有機的・無機的な手段を通じて運用資産を拡大する野心的な計画を持ち、直近では、2023 年 11 月に英オズモシス社の少数株式を取得し、サステナブル投資商品のラインアップを拡充する計画をしている。また、アーク・インベストメントとは重要なパートナーシップを結んでいるが、アーク・インベストメントのリスク管理の慣行は不十分と考え、同パートナーシップを引き続き懐疑的に見ている。

同社の強みは日本株式にあり、外国債券の分野は強化が必要と考えている。同社はコア・コンピタンス外の分野では外部委託先と連携している。これら外部パートナーの約半数が上位のモーニングスター運用会社評価を付与されている。しかし、投資家の需要を捉えるために「流行」を利用し、しばしば急速な活況と落ち込みを繰り返しうるパフォーマンス・パターンには注意が必要と考える。同社の成長計画が、目先を次々と変え運用商品を多く設定することで達成されないかは引き続き注視が必要と考える。

他の日本の大手資産運用会社と同様、これまでに経営陣の入れ替わりがあった。直近では 2025 年 4 月付でマーク・E・ストックル氏が社外取締役から転じて最高投資責任者 (CIO) に就任し、約 3 年未満で退任した前任の楊氏の後任となった。更に前回同様、親会社から首藤氏が西田氏の後任として代表取締役会長に就任した。このような経営陣の入れ替わりがあるが運用部門の混乱は限定的であった。経営陣はポートフォリオ・マネジャーの自主性を尊重し、過度な干渉をすることを無く、それぞれの投資プロセスや投資スタイルを重んじている。新たな経営陣と 2025 年 9 月からのアモーヴァ・アセットマネジメントとしての新体制下での運用部門の展開を引き続き注視する。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	74	26 / 60

	残高 (10 億円)
上場インデックスファンド TOPIX	12,625
上場インデックスファンド 225	5,910
グローバル・ロボティクス株式 F(年 2 回決算)	585
上場インデックスファンド JPX 日経 400	482
グローバル・ロボティクス株式 F(1 年決算)	470

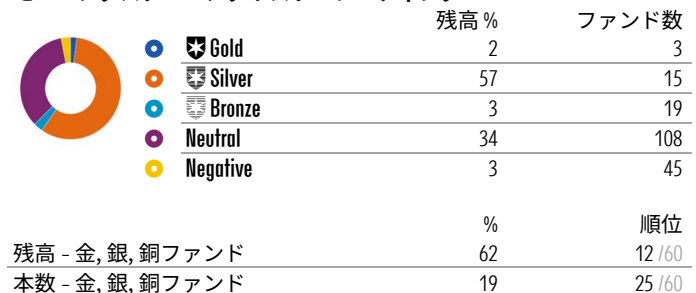
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	5 / 32 / 60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	2 / 31 / 60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	4 / 18 / 60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	5 / 33 / 60
投信: 平均運用期間 (年)	16.6
ETF: 平均運用期間 (年)	9.6

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	14	37 / 60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

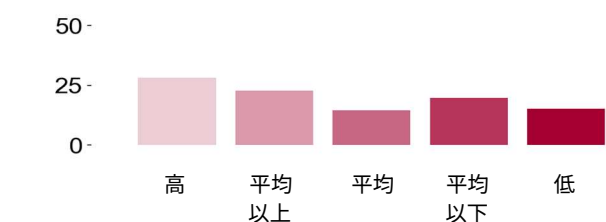
モーニングスター・レーティング平均	3.1	順位
		21 / 60



	%	順位
成功率 (3 年)	45	25 / 60
成功率 (5 年)	43	21 / 60
成功率 (10 年)	28	22 / 60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	57	順位
		45 / 60



アセットマネジメント One

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価		平均	純資金流入額			純資金流出率		
評価日	4/21/2025		運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
アナリスト	Morningstar Manager Research	日本	14,154	5 /60	37.4	21 /60	0.3	36 /60

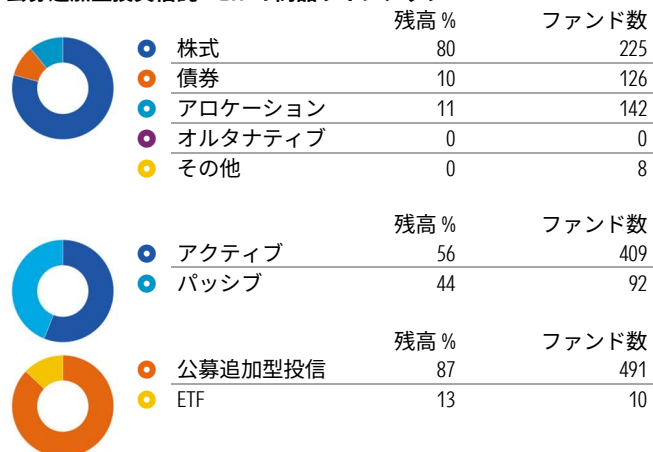
モーニングスター運用会社分析コメント

統合により日本最大級の資産運用会社となったアセットマネジメント One に「平均」の評価を付与する。

同社は 2016 年にみずほ FG 傘下の資産運用会社 3 社とみずほ信託銀行の資産運用部門の統合により発足した運用会社で、みずほ FG と第一生命 HD を株主に持つ。統合を経て数年経つ現在では、投資文化は上手く融合されており、組織変更があったにもかかわらず運用チームの離職率は低い。大手金融機関傘下の運用会社であることから、規模のメリットと膨大な顧客基盤を享受し運用会社として経営の安定性を確保している一方、顧客のあらゆるニーズに応えようとする営業寄りの姿勢が、幅広い商品のラインアップから散見される。同社は近年杉原 CEO と丸山CIO の下、ポートフォリオ・マネジャー（PM）がより運用業務に集中できるよう運用組織の再編や、PM を中長期のパフォーマンスを重視して評価するなど、モーニングスターが高く評価する施策を打ち出してきた。同社が更に良い運用会社となることを期待しつつも、他の日本の大手資産運用会社と同様、過去の経営陣の入れ替わりは激しかった。

同社は 2025 年 5 月より運用本部長の交代を予定しており、丸山氏が退任し現在運用本部共同部長を務める村松氏が後任となる。丸山氏は 2022 年にフィデリティ投信から同社に入社してから 3 年しか経過していないことを考慮すると、今回の退任はやや予想外であるものの、十分な移行期間が設けられていることから、スムーズな引き継ぎが行われると見込まれる。また、今回の人事は妥当であると考えている。村松氏の昇格は社内からであることに加え、2016 年の統合時に責任者の一人として統合を推進し、同社の沿革を熟知している杉原氏も引き続き取締役社長に留まることから、同社の戦略的方向性に大きな変化は見込まれないと考える。モーニングスターでは今後の村松氏の新体制下での運用部門の展開を引き続き注視する。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	30	58 / 60

	残高 (10 億円)
グローバル ESG ハイクオリティ成長株式(H 無)	1,086
たわらノーロード 先進国株式	947
グローバル・ハイクオリティ成長株式 F(H 無)	884
One ETF トピックス	666
DIAM 外国株式インデックスファンド	654

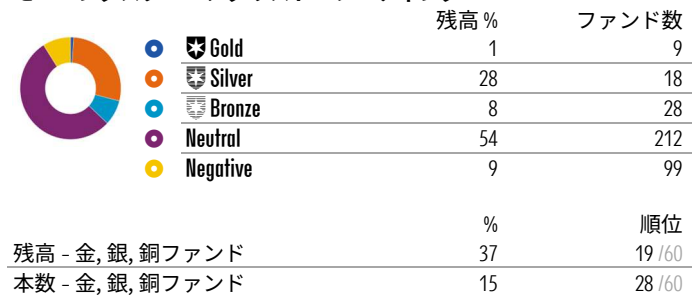
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	4 / 27 / 60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	7 / 45 / 60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	3 / 13 / 60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	6 / 40 / 60
投信: 平均運用期間 (年)	15.0
ETF: 平均運用期間 (年)	7.8

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	23	24 / 60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

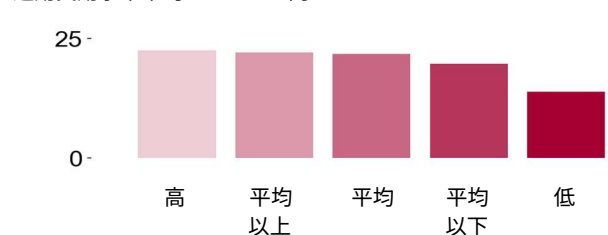
モーニングスター・レーティング平均	順位
2.9	37 / 60



	%	順位
成功率 (3 年)	34	40 / 60
成功率 (5 年)	29	38 / 60
成功率 (10 年)	23	29 / 60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	順位
55	37 / 60



三井住友 DS アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価		平均以上		純資金流入額		純資金流出率	
評価日	2/13/2025	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
アナリスト	橋本 直子	日本	10,728	6 /60	436.3	8 /60	4.8
							26 /60

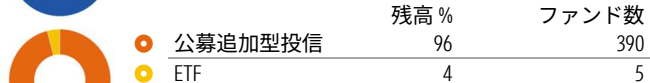
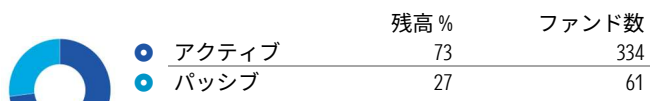
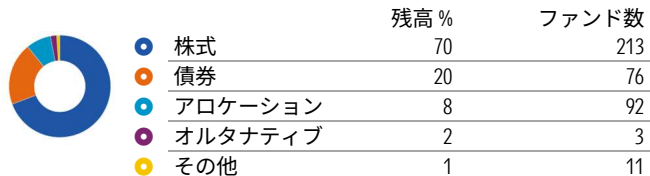
モーニングスター運用会社分析コメント

三井住友 DS アセット (SMDAM) は、運用会社としての独立性を高め、アクティブ運用における確かな実力とバランスの取れた商品ラインナップを有することから、運用会社評価を「平均以上」とする。同社は三井住友 FG の子会社で、2019 年に三井住友アセットマネジメントと大和住銀投信投資顧問の合併による設立以来、機関投資家と個人投資家への影響力を順調に拡大している。

同社は、2025 年 4 月に経営陣の交代により、旧 CEO の猿田氏が会長に就任し、荻原氏が新 CEO となった。モーニングスターでは、CEO 交代は円滑に行われ、同社の独立性と猿田氏の下で進めてきた戦略が後退する可能性は低いと考えている。荻原氏は野村 AM で 30 年以上の投資経験を積んだ後、SMDAM で猿田氏の下、2 年間副社長としての経験を有し、同社を率いる十分な能力を備えている。2023 年 4 月に社外から荻原氏を招聘したことに続き、今回同氏が新 CEO となることは、同社の独立性の維持に関する懸念を払拭するものである。また、猿田氏が会長として引き続き同社に留まることにより、戦略の継続性が保たれ、取り組み中の課題も解消されることが期待される。

同社は日本株運用力の強化と他分野における運用能力をじっくりと拡充させつつ、同社の運用力では補えない領域については外部委託を適切に活用している。同社の商品開発への取り組みは、販売優先ではなく長期的な視点で行われており、モーニングスターではこの点を評価している。一方、ポートフォリオ・マネジャーの変動報酬については短期的なパフォーマンスを重視したものではなく、評価期間を長期化することにより、投資家との利害の一致をより深めることができると考えている。なお、同社のキャパシティ管理が合理的であることは、運用残高の急激な増加に伴い、複数の中小型株ファンドで実施された新規受付停止の実績からも明らかであり、同社が商品品質の維持と投資家の利益保護を重視していることを示している。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	22	60 /60

	残高 (10 億円)
日興 FW・日本債券ファンド	548
三井住友・DC 外国株式インデックス FS	543
グローバル AI ファンド	485
SMBC ファンドラップ・日本債	410
三井住友・DC つみたて NISA・全海外株 IF	349

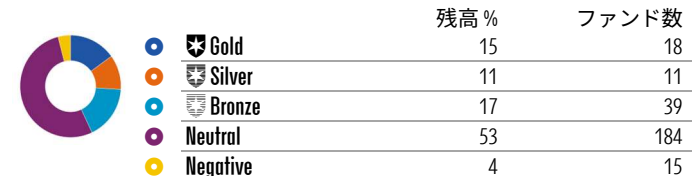
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	5 /32 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	5 /37 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	5 /22 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	7 /46 /60
投信: 平均運用期間 (年)	11.6
ETF: 平均運用期間 (年)	5.8

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	25	16 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



	%	順位
残高 - 金, 銀, 銅ファンド	44	16 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	25	19 /60

パフォーマンス

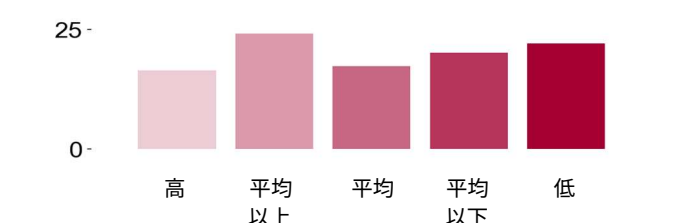
モーニングスター・レーティング平均	3.1	順位
		26 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	42	28 /60
成功率 (5 年)	36	28 /60
成功率 (10 年)	29	21 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	49	順位
		28 /60



三井住友トラスト・アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価 平均	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額			純資金流出率		
				運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
	7/11/2025	橋本 直子		8,953	7 / 60	157.0	12 / 60	2.0	32 / 60

モーニングスター運用会社分析コメント

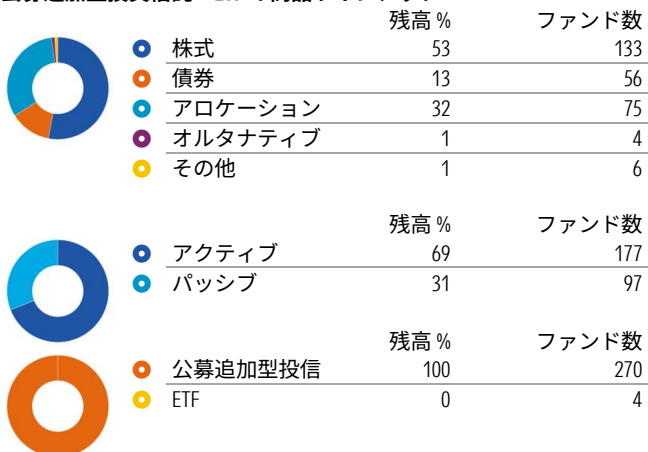
三井住友トラスト・アセットは、運用力向上に積極的に取り組んでいる点は評価できるものの、経営層人事に関する親会社の影響力や、運用商品ラインナップのばらつきは留意が必要である。同社の運用会社評価を「平均」とする。

同社は三井住友トラスト・グループの子会社である。2018 年 10 月には、同グループの三井住友信託銀行の運用部門を戦略的に同社に統合し、債券運用やパッシブ運用を含め同社の運用力は強化された。

同社は経営陣の交代期を迎えており、2025 年 10 月に現 CEO の菱田氏が退任し、小林氏が新 CEO に就任する。モーニングスターではこの交代が円滑に進むとみており、同社の戦略方針が大きく後退する可能性は低いと考えている。小林氏は 2004 年に旧住友信託銀行（現三井住友信託銀行）に入社し、長年にわたり資産運用に関連する業務等を担当した後、2018 年の統合以降、同社の経営企画部長を務めてきた。新たな役割におけるリーダーシップは今後の注視点であるものの、今回の承継プロセスは秩序立っており、戦略の継続性が維持されることを裏付けている。

同社は、2024 年 12 月までの過去 5 年間でポートフォリオ・マネージャーを約 20%増員し、離職率を低水準に抑えており、同社の運用人材が安定して増加していることを示している。また、自己資金で試験的に運用し実績を積み上げた後に運用商品を一般向けに販売することで販売網を拡大しており、モーニングスターではこの取り組みを高く評価している。また、同社はアクティブ ETF をはじめ、コスト効率の高い ETF を提供している。一方で、同社の残高上位には、投資家がパフォーマンスを後追いしがちなテーマ型ファンドが残高上位に位置しており、長期パフォーマンスに焦点を当てた運用商品ラインナップの構築は進行中と見ている。グループの一員として残高目標の達成も追求しながら、同社が運用会社としての独立性を維持し、投資家の長期的な利益に貢献する取り組みを継続することができるか、今後も注視していく。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	23	59 / 60

残高 (10 億円)

次世代通信関連 世界株式戦略ファンド	551
世界経済インデックスファンド	449
外国株式 SMTB セレクション(SMA 専用)	400
国内債券 SMTB セレクション(SMA 専用)	343
国内株式 SMTB セレクション(SMA 専用)	323

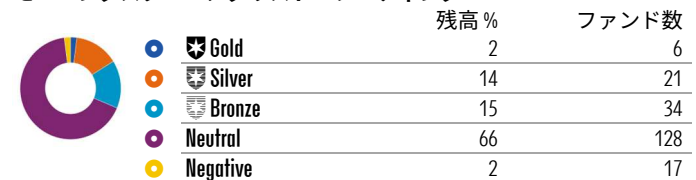
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	2 / 21 / 60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	6 / 41 / 60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	4 / 19 / 60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	5 / 31 / 60
投信: 平均運用期間 (年)	12.0
ETF: 平均運用期間 (年)	2.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	11	39 / 60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



	%	順位
残高 - 金, 銀, 銅ファンド	32	22 / 60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	30	17 / 60

パフォーマンス

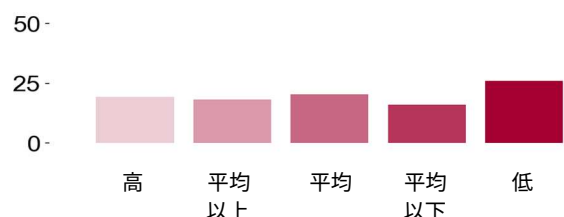
モーニングスター・レーティング平均	3.3	順位
		14 / 60



	%	順位
成功率 (3 年)	48	21 / 60
成功率 (5 年)	45	17 / 60
成功率 (10 年)	38	14 / 60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	48	順位
		23 / 60



フィデリティ・インターナショナル

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価		平均以上	純資金流入額			純資金流出率		
評価日	7/11/2025		運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
アナリスト	Giovanni Cafaro	日本	6,542	8 /60	737.7	5 /60	13.7	15 /60

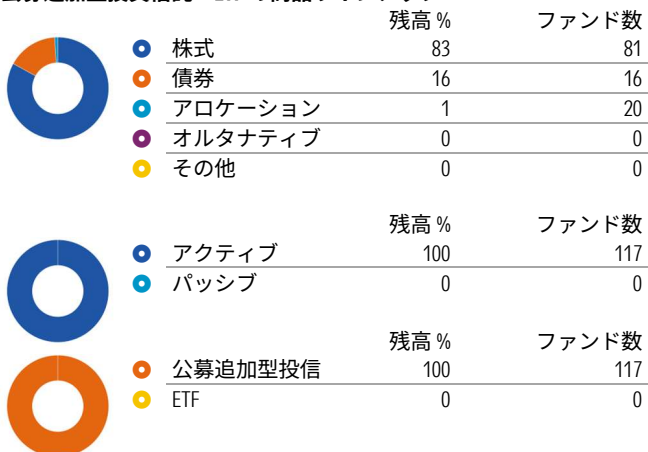
モーニングスター運用会社分析コメント

フィデリティ・インターナショナル (FIL) は、近年大幅な組織再編を進めている一方、顧客利益重視の姿勢を維持しているため、運用会社の評価を「平均以上」とする。

2024 年以降、経営陣および運用部門において主要ポジションにおける人事異動が相次いでいる。2024 年 3 月には Keith Metters 氏が CEO に就任し、前 CEO の Anne Richards 氏は副会長として残留。同年 6 月にはグローバル共同 CIO の Andrew McCaffery 氏が退任し、株式部門を統括する共同 CIO として Niamh Brodie-Machura 氏が着任した。Brodie-Machura 氏は株式部門を統括し、カナダ責任者である Andrew Wells 氏（債券、マルチアセット、プライベート資産の CIO 業務を兼務）と共に運用部門を率いる。さらに 2025 年 9 月には AXA IM のグローバル債券責任者 Marion Le Morhedec 氏が債券部門のグローバル CIO として加わり、2025 年 3 月に退任した Steve Ellis 氏の後任となる。こうした変化は、2024-25 年にかけて実施されたコスト抑制策と重なり、運用チームの縮小や離職率の上昇を招いており、運用力への影響は引き続き注視が必要である。ただし、世界各拠点に約 300 名のポートフォリオ・マネジャーとアナリストを擁し、同社の強みである独自のファンダメンタル重視のリサーチ体制は、引き続き健在である。

戦略的な取り組みは適切であり、米国の Fidelity Investments の Johnson 家や FIL の従業員が大口株主として参加する同社の所有構造により、長期的な視点が保たれている。同社はプライベートクレジットの運用能力を拡充するとともに、アクティブ ETF を含む商品構成の多様化を進めている。カナダ事業は成長エンジンとして、国内 RIA 市場で強固な地位を維持。資産クラス間の報酬体系には依然差異があるものの、投資家利益との整合性を高める方向で改善が進んでいる。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	52	47 /60

残高 (10 億円)

世界割安成長株投信 B(為替ヘッジなし)	907
US リート・ファンド B(為替ヘッジなし)	710
US ハイ・イールド F(毎月)B(為替ヘッジなし)	706
フィデリティ・日本成長株・ファンド	593
グロース・オポチュニティ D(毎月・予・H 無)	473

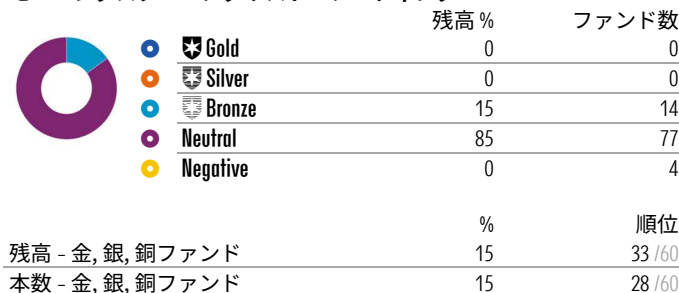
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	23 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	40 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	31 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	28 /60
投信: 平均運用期間 (年)	13.0
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	30	13 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

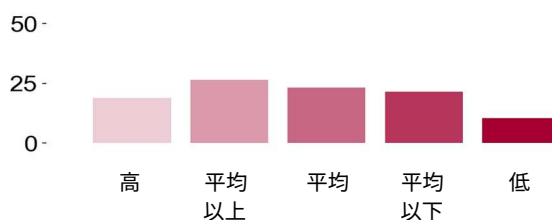
モーニングスター・レーティング平均	3.4	順位
		7 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	49	19 /60
成功率 (5 年)	59	7 /60
成功率 (10 年)	35	17 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	56	順位
		43 /60



ブラックロック

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均以上	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額			純資金流入率		
					運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
		1/10/2025	Jason Kephart		6,337	9 /60	44.1	19 /60	0.8	34 /60

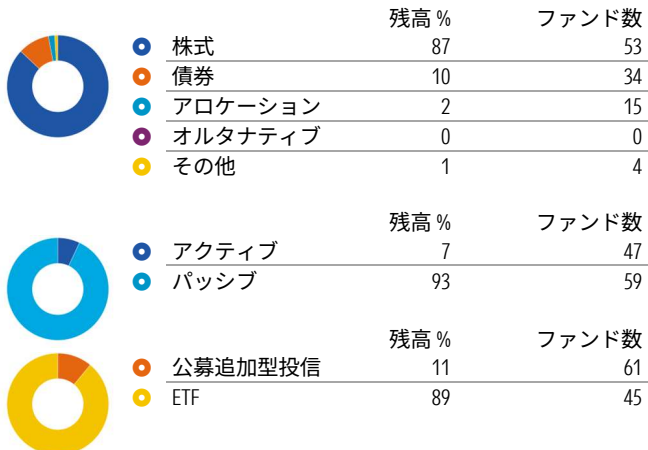
モーニングスター運用会社分析コメント

ブラックロックは、幅広い分野に対応できる資産運用会社としての水準を押し上げている。2024 年には、インフラやクレジット、オルタナティブファンドのデータ運用能力を獲得するため積極的にプライベート資産を買収し、その商品・サービスの幅は他社に比べても群を抜いている。これらの買収が、2009 年の Barclays Global Investors 買収（現在の象徴的な ETF ブランドである iShares を含む）と同様に、投資家にとって変革的かつ有益なものになるかは今後の注目点である。引き続き同社の運用会社評価を「平均以上」とする。

同社には、楽観的に評価できる根拠がある。CEO の Larry Fink 氏は、規模拡大を狙うのではなく、BlackRock が提供できるサービスの幅を広げることにより重点を置いた買収実績で突出している。同社は、金融アドバイザー向けの人気のモデルポートフォリオを通じて、ダイレクト・インデックスなどの自社商品を低コストでパッケージ化し、投資家の成果向上に大きく寄与してきた。投資判断に多くの時間を割けない投資家にとっては、同社のターゲットデート戦略や、以前の主力だったグローバル・アロケーション戦略といったマルチアセットの選択肢は、いずれもモーニングスター・カテゴリーの中で有力な選択肢となっている。

自らポートフォリオを構築したい投資家にとっては、低コストの iShares ETF を中心とした基盤となる ETF や、充実した伝統的債券戦略のラインアップが利用できる。一方で、債券チームでは近年、特に欧州のシニアリーダーを中心に想定以上の人事異動が続いているものの、債券部門の最高投資責任者 Rick Rieder 氏が、幅広い人材から次世代のマネジャーやアナリストを育成してきた実績は、引き続き強い信頼感につながっている。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	73	28 /60

	残高 (10 億円)
i シェアーズ・コア TOPIX ETF	2,062
i シェアーズ・コア 日経 225 ETF	1,548
i シェアーズ JPX 日経 400 ETF	425
i シェアーズ・コア リート ETF	402
i シェアーズ 米国債 20 年超 ETF(H 有)	172

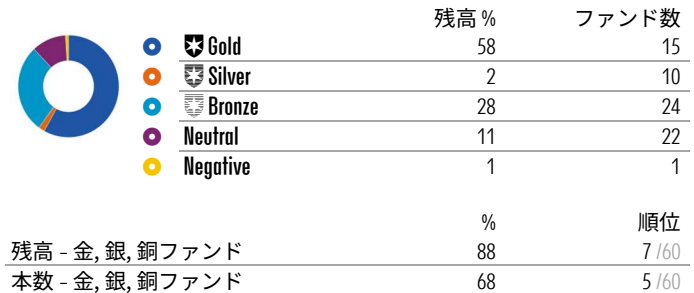
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	4 /30 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	3 /35 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	9 /39 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	4 /26 /60
投信: 平均運用期間 (年)	12.4
ETF: 平均運用期間 (年)	5.1

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	21	26 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

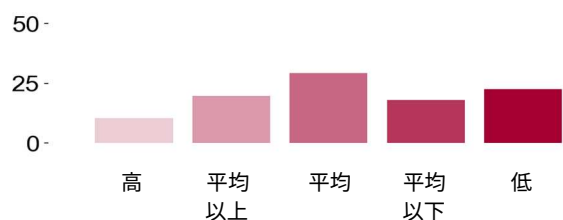
モーニングスター・レーティング平均	2.9	順位
		34 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	43	26 /60
成功率 (5 年)	43	19 /60
成功率 (10 年)	41	11 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	44	順位
		17 /60



アライアンス・バーンスタイン

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均	純資金流入額			純資金流入率			
評価日	6/7/2024	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位	
アナリスト	Jason Kephart	日本	5,912	10 /60	840.0	4 /60	17.3	12 /60

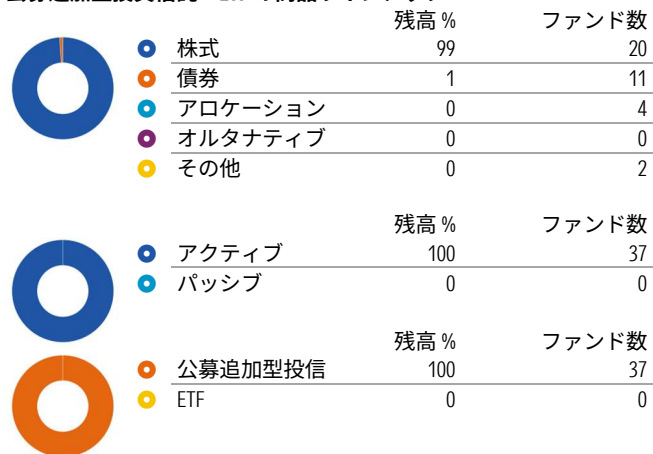
モーニングスター運用会社分析コメント

アライアンス・バーンスタインは現在、プロセス改善や顧客の目標・リスク許容度に応じた運用の実現に注力している。なお、運用会社評価は現時点で引き続き「平均」とする。

CEO の Seth Bernstein 氏と同社のシニアリーダーは、機械学習や人工知能といった定量分析ツールへの投資を優先してきた。これらのツールにより、投資チームは多くの顧客に対して、目標やリスク許容度に応じて柔軟に運用戦略を調整することが可能になる。こうした個別最適化は競合他社でも注目されているが、同社はすでに米国で最大規模のカスタム・ターゲットデートファンドの提供者の一つであり、地方債セパレートアカウント (SMA) の運用・サービス能力も過去数年間で大幅に向上している。例えば、米国で地方債 SMA の運用において、税金面も意識した対応ができる限られた運用会社の一つである。

また、同社は商品ラインアップの拡充も進めている。2022 年にはプライベートクレジット運用会社の CarVal Investors を買収し、プライベート戦略を補完したほか、将来的にはプライベートクレジット・インターバルファンドの導入が予定されている。さらに、2022 年以降、債券や株式のアクティブ ETF に加え、オプション型やテーマ型の ETF も含めて新規設定を行っている。既存ファンドでは大型グロース株や債券で一定の強みを示しているが、全体のパフォーマンスは平均的な水準にとどまっている。米国市場が最大の市場であるが、同社はアジア太平洋地域でも長い歴史と一定のビジネス面での成功を有している。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	96	7 / 60

残高 (10 億円)

AB 米国成長株投信 D 毎月(H 無)予想分配金提示	3,429
AB 米国成長株投信 B(H 無)	1,811
AB 米国成長株投信 C 毎月(H 有)予想分配金提示	236
AB 米国成長株投信 A(H 有)	120
AB 米国成長株投信 B(野村 SMA・EW 向け)	85

商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	7 / 36
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	0 / 1
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	15 / 50
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	3 / 22
投信: 平均運用期間 (年)	11.5
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	19	31 / 60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

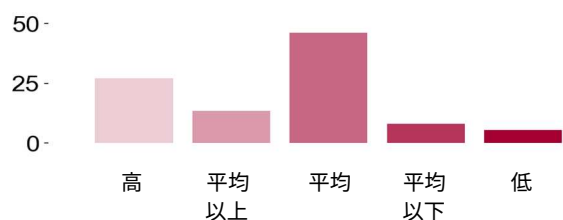
モーニングスター・レーティング平均	順位
3.1	24 / 60



	%	順位
成功率 (3 年)	53	12 / 60
成功率 (5 年)	30	35 / 60
成功率 (10 年)	60	3 / 60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	順位
60	48 / 60



インベスコ・アセット

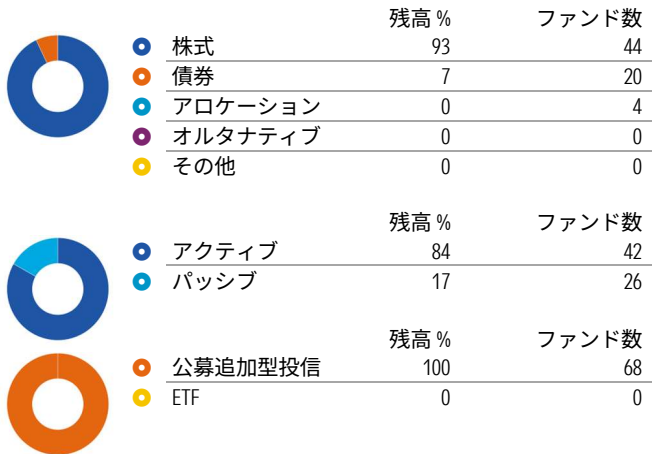
ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均	純資金流入額			純資金流入率			
評価日	12/23/2024	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位	
アナリスト	Alyssa Stankiewicz	日本	3,696	14 /60	1445.0	2 /60	65.3	2 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

インベスコは、2023 年半ばに Andrew Schlossberg 氏が CEO に就任して以来、大規模な組織改革を進めている。運用会社評価は「平均」である。Schlossberg 氏は就任から 18 カ月の間に経営幹部チームを再編し、一部の機能を改善・強化した。運用部門では、Stephanie Butcher 氏と Tony Wong 氏が共同ヘッドを務め、Butcher 氏が株式とマルチアセット、ウォンが債券とプライベート市場を担当している。さらに、2019 年に買収した OppenheimerFunds との統合が進み、2024 年には Sergey Davalchenko 氏が国際株式部門の責任者として加わった。加えて、投資リスク、オペレーション、プロダクト、人事などの主要機能でもリーダーが新たに就任しており、変革の規模とスピードに関しては依然として不確実性が残る。同社の資産構成も近年大きく変化している。2024 年 11 月時点で、ファンド・オブ・ファンズを除く運用資産の約 3 分の 2 がパッシブ戦略に基づいており、これは 3 年前の半分未満から大幅に増加したことを示している。特に、Invesco QQQ Trust は資金流入と市場上昇を背景に 3,000 億米ドルを超える規模に拡大している。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	91	14 /60

	残高 (10 億円)
世界厳選株式オープン(毎月決算型)	2,666
世界厳選株式オープン(年 1 回決算型)	354
先進国株式インデックス・OP(ラップ)	174
先進国債券インデックス・OP(ラップ)	114
国内債券インデックス・オープン(ラップ)	74

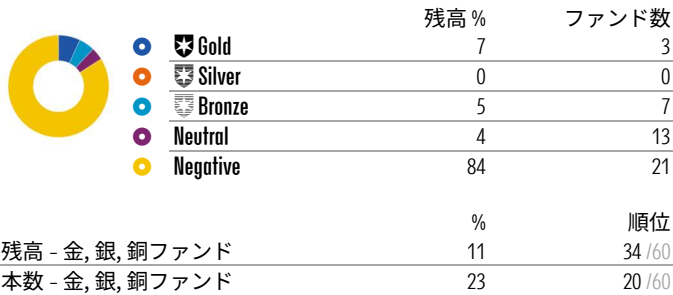
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	11 /46
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	6 /43
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	5 /25
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	5 /34
投信: 平均運用期間 (年)	9.2
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

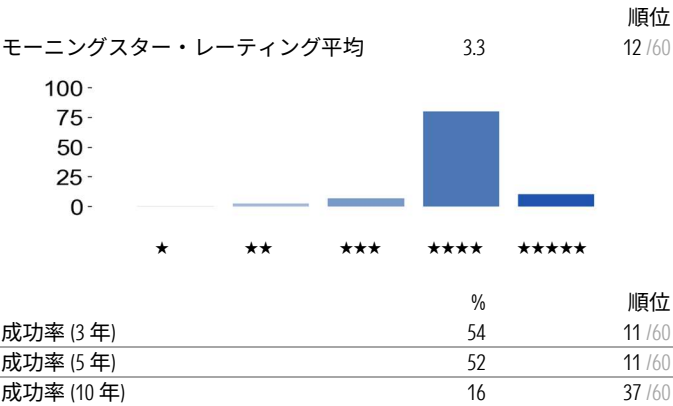
サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	25	18 /60

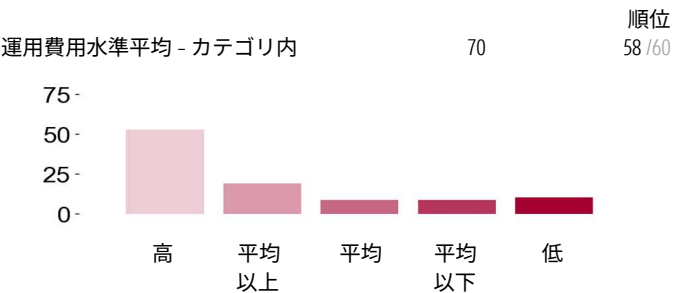
モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス



運用費用水準



ゴールドマン・サックス・アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均	純資金流入額			純資金流出率			
評価日	2/12/2025	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位	
アナリスト	Tom Murphy	日本	3,007	15 /60	-124.3	59 /60	-4.8	45 /60

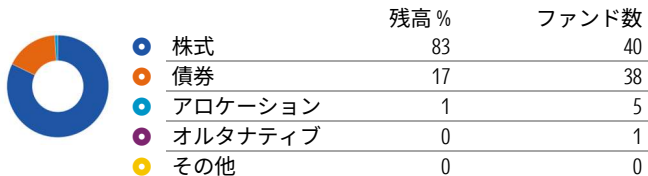
モーニングスター運用会社分析コメント

ゴールドマン・サックス・アセット・マネジメント (GSAM) は、経営陣の交代や運用チームの入れ替わりが続いていることから、運用会社評価を「平均」とする。

ゴールドマン・サックスの投資銀行部門のベテランであった Marc Nachmann 氏は、2022 年に資産運用と富裕層向けの事業をアセット&ウェルス マネジメント部門として統合した際に、同部門のグローバル・ヘッドに就任した。この事業部門再編は、GSAM が NNIP の買収を完了して、欧州における事業範囲を拡大、サステナブル投資の専門性を高めてから 1 年も経たないうちに行われた。この再編から 2 年の間に、同社は大幅な人員の入れ替えに見舞われた。資産運用部門の共同責任者であった両名ともに役職に就いてわずか 2 年で離職した。また債券、マルチアセット、株式、リスク管理チームにてリーダークラスの離職にも見舞われ、これはアナリストの入れ替わりが相次いだことと同じ時期であった。同社は人員の補充を行っているものの、変化の規模とペースは劇的なものであった。

Nachmann 氏のリーダーシップのもと、同社は運用商品開発とガバナンスの強化に取り組んでいる。同社は近年、新規運用商品を設定するペースを落とし、残高の少ないテーマ型ファンドを閉鎖（償還）した。同社は 2024 年に新規運用商品に関わる役職に 2 名の上級管理職を採用した。専門的な知見が加わることはプラスではあるものの、このチームが恒常的な成果を上げるには時間がかかるだろう。クオンツ株式運用と米国地方債運用に明るい兆しがあることを除けば、運用能力が際立っているとは言い難い。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	69	33 /60

残高 (10 億円)

netWIN GS テクノロジー株式ファンド B(H 無)	1,410
GS フューチャー・テクノロジーL B(H 無)	201
GS ワールド・シフト株式ファンド B(H 無)	163
netWIN GS テクノロジー株式ファンド A(H 有)	158
グローバル・ビッグデータ投資戦略 B(H 無)	140

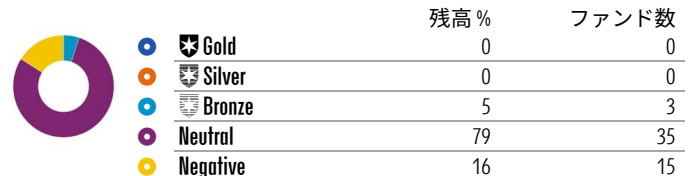
商品ラインアップの変化

		順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	4	28 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	1	28 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	6	26 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	5	31 /60
投信: 平均運用期間 (年)	12.3	
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0	

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	26	15 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



残高 - 金, 銀, 銅ファンド	%	順位
	5	36 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド		
	6	34 /60

パフォーマンス

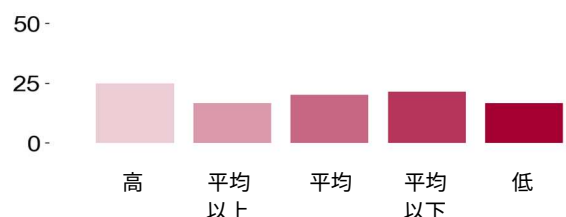
モーニングスター・レーティング平均	3.0	順位
		29 /60



成功率 (3 年)	%	順位
	40	32 /60
成功率 (5 年)		
	31	34 /60
成功率 (10 年)		
	19	33 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	54	順位
		34 /60



ピクテ

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均以上	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額		純資金流出率	
					運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
		12/16/2024	Natalia Wolfstetter		2,916	16 /60	385.4	10 /60
							17.3	12 /60

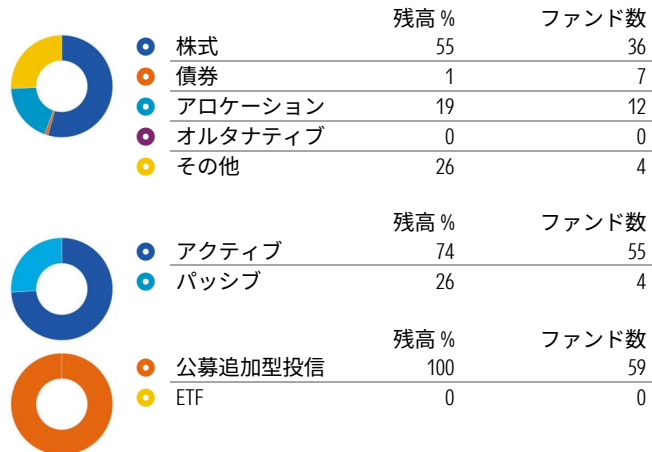
モーニングスター運用会社分析コメント

ピクテ・アセット・マネジメントは、スイスのプライベートバンクである Pictet & Cie の安定したオーナーシップを背景に堅実な運用基盤を維持している。経営陣の交代は比較的まれだが、2024 年には共同 CEO が就任するなど、変化は時として起こり得る。同社は幅広い資産クラスを手掛けつつ、新興国投資とテーマ型ファンドを中核領域とする。特にテーマ型は株式資産の大半を占め、同社は 2000 年代からテーマ投資の先駆者としての地位を確立した。同社の長期的な視点、慎重な運用規模管理、規律ある投資プロセスは、短期的なトレンドを追いがちなテーマ型ファンドにおけるリスクを軽減している。

新規戦略の立ち上げは慎重で、必要なリソースも備えているものの、必ずしも全領域が強みを発揮しているわけではない。同社は、マルチブティック体制により運用者に高い裁量を与えられており、運用チームは長年にわたり高い安定性を維持してきた。ただし、2018 年の新興国債券および主要なテーマ型株式の運用チームで大規模な離任が発生し、2023 年初頭にもテーマ株式チームの再度の変動があった。近年のオルタナティブ領域でも高い離職率が見られるが、チーム全体の経験値が高いため、キーパーソンリスクは一定程度抑えられている。

パフォーマンス悪化や資金流出がみられた時期でもリソース拡充を続けており、報酬制度も改善が進む。2023 年以降、運用スタッフの変動報酬は最大 5 年間のパフォーマンスに連動する形となり、2021 年にはファンドシェアへのボーナスの自主的な繰り延べ制度が導入され、対象社員の約 3 分の 2 がこれを利用している。これらの取り組みは、ファンド投資家との長期的な利害一致を強化するものであり、長期的な戦略的焦点と歴史的な安定性を考慮すると、同社の運用会社評価は「平均以上」に相応しいと考える。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	68	36 /60

残高 (10 億円)

ピクテ・グローバル・インカム株式 F(毎月)	921
ピクテ・ゴールド(為替ヘッジなし)	547
ピクテ・ゴールド(為替ヘッジあり)	177
ピクテ・マルチアセット・アロケーション F	169
ピクテ・ゴールデン・リスクプレミアム・F	156

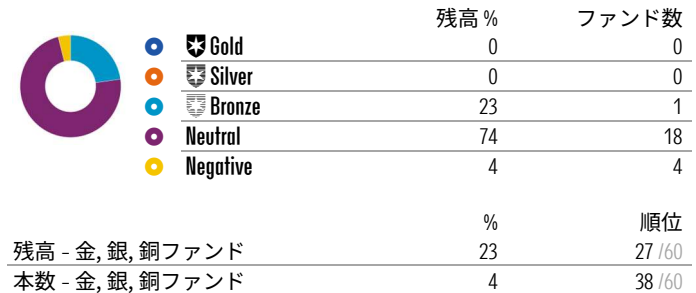
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	22 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	49 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	22 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	49 /60
投信: 平均運用期間 (年)	10.7
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	68	2 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

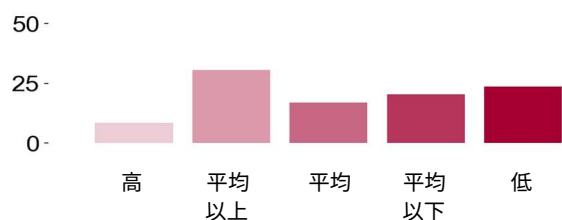
モーニングスター・レーティング平均	順位
2.9	31 /60



成功率 (3 年)	%	順位
	37	34 /60
成功率 (5 年)		
	38	26 /60
成功率 (10 年)		
	20	31 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	順位
46	21 /60



キャピタル・インターナショナル

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価 高	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額		純資金流出率	
				運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
	8/21/2025	Stephen Welch		2,908	17 /60	400.9	9 /60

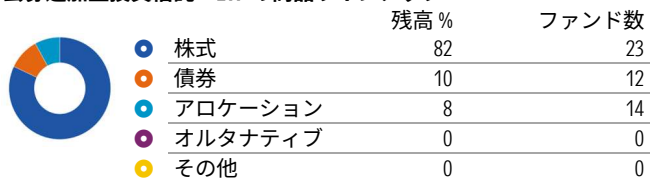
モーニングスター運用会社分析コメント

キャピタル・グループは、環境変化に適応しつつ理念を保ち続けており、引き続き同社の運用会社評価を「高」とする。

同社は新体制への移行期にあるものの、リーダーシップ交代は綿密な後継計画に基づいて進められており、協働的かつ投資家重視の経営姿勢が維持されている。2023 年 10 月には、債券およびグローバルトレーディング部門を率いてきた Mike Gitlin 氏が CEO に就任し、2015 年から会長兼 CEO を務めた Tim Armour 氏の後任として、次世代の経営を担う役割を引き継いだ。また、副会長兼社長の Rob Lovelace 氏は、新たなリーダーシップの定着を支えるべく経営委員会から退いた。さらに、運用子会社を率いてきた Martin Romo 氏と Jody Jonsson 氏がそれぞれ会長兼 CIO、副会長に就任し、運用の専門性を中核に据えた体制強化を進めている。これらの動きは、同社の継続的な後継者計画と、運用の専門性を重視する経営姿勢を示している。

同社はその他の変化にも慎重に取り組んでいる。投資家の需要を踏まえ、2022 年以降はアクティブ ETF を中心に 24 本の ETF（株式 13 本、債券 10 本、アロケーション 1 本）を新規設定した。これらの新ファンドは、キャピタル・グループのブランドで展開されており、従来の American Funds のファンドと類似性を持ちながらも独自性を備えている。また、同社はアクティブ・パッシブモデルやパブリック・プライベート型のインターバルファンドも導入している。アクティブ・パッシブではバンガードブラックロック、シュワブなど信頼性の高い運用会社と提携し、オルタナティブ投資への進出では、世界的なプライベート投資大手 KKR と協業している。これらの戦略は、同社の投資哲学とマルチマネジャー体制を活用し、経験豊かな運用者を基盤に、多角化と伝統の両立を実現している。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	66	37 /60

	残高 (10 億円)
キャピタル世界株式ファンド	933
キャピタル世界株式 F 年 2 回決算(分配重視)	403
インベスト・カンパニー・アメリカ ICA	241
キャピタル世界株式 F(DC 年金つみたて)	198
キャピタル世界株式ファンド NF	142

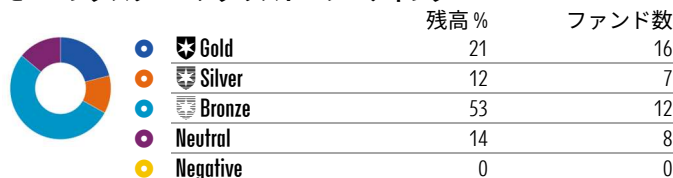
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	42 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	32 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	54 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	17 /60
投信: 平均運用期間 (年)	
ETF: 平均運用期間 (年)	

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	6	44 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



	%	順位
残高 - 金, 銀, 銅ファンド	86	9 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	81	3 /60

パフォーマンス

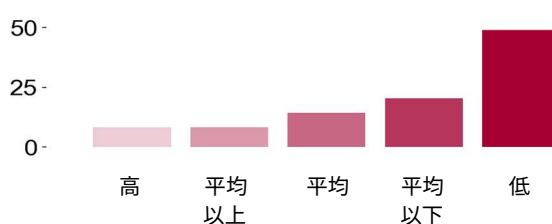
モーニングスター・レーティング平均	順位
3.0	27 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	63	6 /60
成功率 (5 年)	67	5 /60
成功率 (10 年)	50	5 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	順位
30	5 /60



ティー・ロウ・プライス

運用会社評価 高			ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)				
評価日	6/21/2024		純資金流入額		純資金流出率		
アナリスト	Adam Sabban		運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年
			日本	1,550	20 /60	-107.2	58 /60
						-7.7	50 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

ティー・ロー・プライスは、投資家重視の企業文化、卓越した運用能力、そして人材の維持・育成における高い実績により、他社との差別化を図り続けており、同社の運用会社評価を「高」とする。同社の主力である株式運用部門は、優秀なポートフォリオ・マネジャーと高い評価を受けるアナリスト陣によって支えられ、同社の強みの一つとなっている。株式資産の多くはミューチュアル・ファンドに集中しているが、競合より他の投資ビークルへの展開は遅れたものの、ETF などの新商品を通じて多様化を進めている。近年、パッシブ運用商品の人気や競合他社のアクティブ ETF の台頭により、株式部門は資金流出に直面しているものの、同社の多くの魅力的な運用戦略は今後の持続的な成長を支えると期待される。

株式部門の課題を補うのが、好調なマルチアセット部門であり、2024 年 3 月時点で約 1.5 兆米ドルの運用資産のうち 3 分の 1 を占めるまでに成長している。ターゲットデート・ファンドや戦術的アロケーション・ファンドは業界最高水準の実績を誇る。債券運用部門では、地方債やクレジット関連戦略といった分野で優れた成果が見られる一方、コア債券戦略など一部の分野では課題が残る。しかし、新たなリーダーシップの下での改革やリスク管理部門の強化に向けた採用活動が進んでおり、今後の改善が期待される。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ

	残高 %	ファンド数
株式	100	22
債券	0	0
アロケーション	0	0
オルタナティブ	0	0
その他	0	0

	残高 %	ファンド数
アクティブ	100	22
パッシブ	0	0

	残高 %	ファンド数
公募追加型投信	100	22
ETF	0	0

残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	79	24 /60

	残高 (10 億円)
米国成長株式ファンド	515
世界厳選成長株式 F B I 資産成長型・H 無)	299
米国オールキャップ株式ファンド	232
米国割安優良株式ファンド B (ヘッジ無)	96
グローバル・テクノロジー株式 F B H 無	76

商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	16 /50
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	0 /1
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	23 /56
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	0 /1
投信: 平均運用期間 (年)	3.4
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	20	27 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング

	残高 %	ファンド数
Gold	5	3
Silver	30	4
Bronze	1	2
Neutral	64	9
Negative	0	0

	%	順位
残高 - 金, 銀, 銅ファンド	36	20 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	50	8 /60

パフォーマンス

モーニングスター・レーティング平均	2.4	順位
		52 /60

	%	順位
成功率 (3 年)	50	15 /60
成功率 (5 年)	0	60 /60
成功率 (10 年)	N/A	N/A /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	35	順位
		10 /60

	高	平均以上	平均	平均以下	低
--	---	------	----	------	---

レオス・キャピタルワークス

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均	評価日	アナリスト	日本	運用資産残高		純資金流入額		純資金流出率	
					運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
		7/3/2025	橋本 直子		1,304	21 /60	-51.5	55 /60	-4.4	44 /60

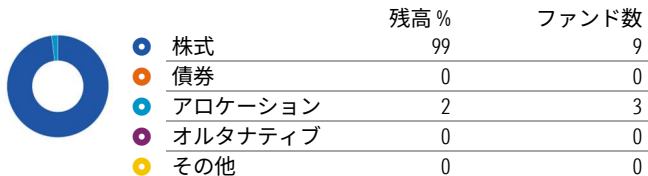
モーニングスター運用会社分析コメント

レオス・キャピタルワークスは、長期志向の投資哲学や投資家目線の手数料体系に強みを持つ一方、ガバナンス面の懸念や主力戦略の大幅な見直しには注意を要するため、運用会社評価は「平均」とする。

同社は 2003 年に独立系の資産運用会社として設立された。2020 年に SBI ホールディングスが筆頭株主となり、2023 年には東証グロース市場に上場。2024 年 4 月には株式移転により SBI グループの完全子会社となり、持株会社「SBI レオスひふみ株式会社」が設立された。この移行により同社の財務基盤は一段と強化されたが、独立性を維持しながら従来の強みに引き続き注力できるかどうかは、今後も注視すべき点である。

留意すべき点の一つは、2024 年 12 月時点で運用資産の 8 割超を占める主力のひふみ戦略である。近年は日本市場で大型株優位の環境が続いたこともあり、中小型株に傾斜した同戦略は資金流出が続く一方、パフォーマンスも伸び悩んだ。2025 年 4 月、同社は運用体制を大幅に見直し、副社長湯浅氏が CIO に就任した。また、リサーチとポートフォリオ構築の強化を目的にアナリストのセクター制を導入した。また、約 20 名で構成される運用チームは、経験豊富なリーダーシップのもと規模拡大しているが、拡大に伴うチームの連携力と安定性については引き続き注視が必要である。運用担当者による自身が運用するファンドへの投資やストックオプション制度は、長期的な運用成果へのコミットメントと投資家利益との整合性を支えているが、現時点では変動報酬がファンドの運用成果に連動していない。同社の直販プラットフォームの手数料体系は、長期保有者向けの割引制度を採用している。これは手数料の軽減により長期投資マインドを促進するとともに、投資家の負担を和らげる特徴的な仕組みであり、モーニングスターではポジティブに評価している。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	92	11 /60

	残高 (10 億円)
ひふみプラス	612
ひふみワールド+	247
ひふみ投信	183
ひふみ年金	96
ひふみワールド	66

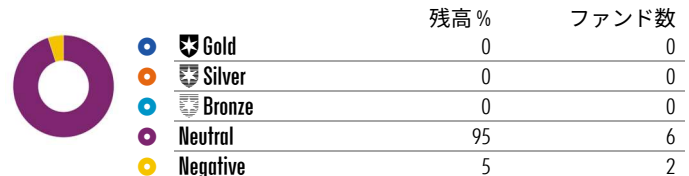
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	0 /1 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	0 /1 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	24 /57 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	0 /1 /60
投信: 平均運用期間 (年)	6.3
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	N/A	N/A /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



残高 - 金, 銀, 銅ファンド	%	順位
	0	60 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド		
	0	60 /60

パフォーマンス

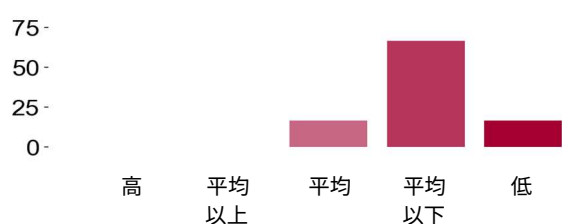
モーニングスター・レーティング平均	2.0	順位
		57 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	0	60 /60
成功率 (5 年)	0	60 /60
成功率 (10 年)	0	60 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	30	順位
		5 /60



J.P.モルガン・アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均以上	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額		純資金流出率	
					運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
		7/3/2024	Alyssa Stankiewicz		868	25 /60	29.5	28 /60
							3.8	27 /60

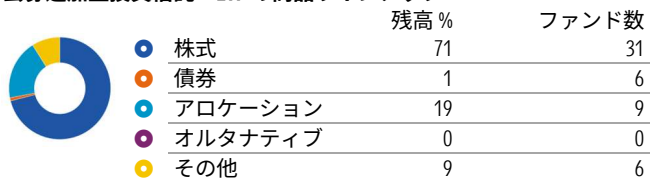
モーニングスター運用会社分析コメント

堅固なリソースと基盤を誇る J.P.モルガン・アセット・マネジメントに引き続き「平均以上」の運用会社評価を付与する。

同社は、投資家の資産を管理する上で、十分なリソースと専門性を持ち合わせており、信頼できる運用会社として責任ある行動をとっている。株式および債券の運用チームは非常に経験豊かで安定しており、特に債券部門では近年大きな組織的な変革を経て、更なる成果を上げている。同社の報酬体系は投資家の利益と整合的であり、上級職員の人材定着率も高く、組織としての安定性にもつながっている。同社では常にイノベーションを追求し、変化をいとわない企業文化が根付いている。さまざまな運用チームや運用戦略を上級職員が実際にレビューするプロセスが、既存の投資委員会のプロセスに組み込まれたことや、自社開発のポートフォリオ管理やリスク管理ツールの導入が進められていることがその例に挙げられる。依然として一部のファンドにおいて高い運用費用を課していることは課題ではあるものの、運用資産残高の拡大に伴い、運用費用削減の取り組みも全体的に進行している。

もっとも、同社に課題が全く無いというわけではない。同社が提供する運用商品は幅広く、一部には改善の余地があると考えられる。例えば、マルチアセットの運用戦略では、複雑な運用プロセスが原因で、やや問題を抱えている。また、同社は中国での事業展開も進めているが、その成果はまだ表れてはいない。同社の全ての運用戦略が他社と比べて優れているとは言えないものの、卓越性を追求する姿勢は一貫しており、同社は引き続き投資家から信頼される運用会社であり続けるであろう。

公募追加型投資信託・ETFの商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	58	42 /60

	残高 (10 億円)
JP モルガン・アメリカ成長株 F(H 無、年 1 回)	171
JPM ベスト・インカム(毎月決算型)	100
JPM ザ・ジャパン	85
JPM グローバル医療関連株式ファンド	77
JP モルガン・アメリカ成長株 F(H 無、毎月)予	75

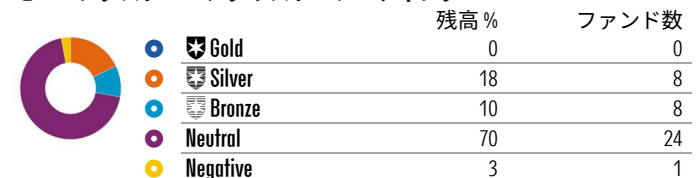
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	21 /53
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	2 /33
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	7 /30
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	12 /55
投信: 平均運用期間 (年)	12.1
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	13	38 /60

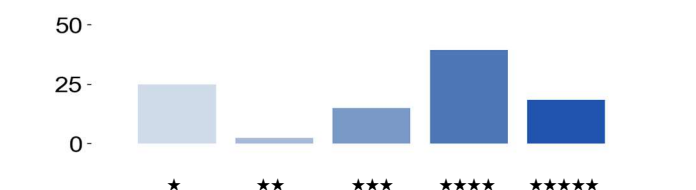
モーニングスター・メダリスト・レーティング



残高 - 金, 銀, 銅ファンド	%	順位
	27	25 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	39	12 /60

パフォーマンス

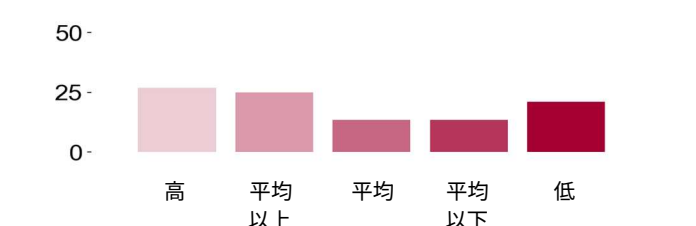
モーニングスター・レーティング平均	順位
3.3	13 /60



成功率 (3 年)	%	順位
	35	38 /60
成功率 (5 年)	16	53 /60
成功率 (10 年)	16	36 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	順位
55	37 /60



アムンディ

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価 平均	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額		純資金流出率	
				運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
	6/2/2025	Mara Dobrescu		827	26 /60	-77.1	56 /60

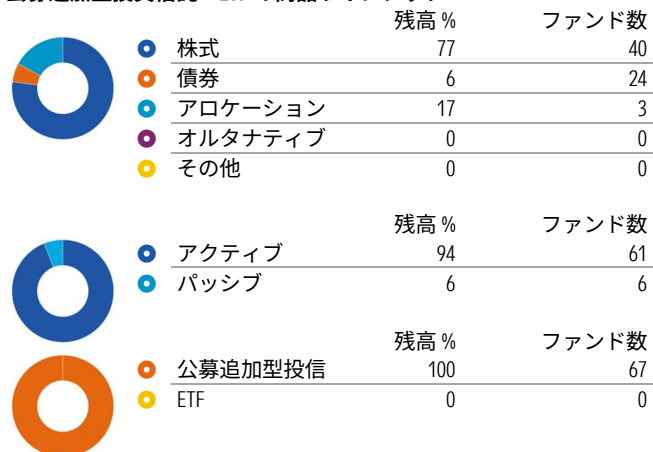
モーニングスター運用会社分析コメント

アムンディは、Victory Capital との提携により米国事業に新たな局面を迎えている。2025 年 4 月、両社は提携を正式に完了し、Amundi は Victory Capital 株の 26% (議決権 4.9%) を取得し、同時に米国子会社 (Pioneer ブランドで運営) が Victory Capital の傘下となった。また、両社は 15 年間の相互提供契約も締結した。この提携により、サポート部門での運営効率化やコスト削減が進められたが、運用チームは大きな影響を受けておらず、安定性が保たれている。Victory Capital はこれまで傘下の運用会社に対して基本的に自主性を尊重する姿勢を示してきたため、Pioneer ブランドの維持や投資判断、リソース配分、プロセスの独立性が維持される見込みである。

この発表は、2021 年に CEO に就任した Valérie Baudson 氏の下で進められてきた一連の買収の一環である。2022 年にはパッシブ運用専門の Lyxor Asset Management を買収し、大きな混乱を伴うことなく統合を完了した。2024 年初頭には、プライベート・エクイティとプライベート・デットを専門とするスイス・チューリッヒ拠点の Alpha Associates を買収した。

一方で、同社は多数のアクティブ・ファンドのラインアップの整理するという課題に直面しており、投資家にとってより明確で高い確信を持てる商品提供を目指しているが、その成果が十分に表れるまでにはなお時間を要している。ポートフォリオ・マネジャーやアナリストの報酬体系は業界標準に沿っているものの、ボーナス算定における長期的リターンへの比重を高めることで、さらなる改善の余地がある。さらに、パッシブ商品の手数料は競争力が高い一方で、アクティブファンドの手数料においても規模を活かしたコスト削減の余地があると見ている。同社の運用会社評価は、引き続き「平均」とする。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	56	45 /60

	残高 (10 億円)
アムンディ・みらい定期便	135
日興レジェンド・イーグル・F(資産成長)	91
日興レジェンド・イーグル・F(毎月決算)	85
アムンディ・ターゲット・ジャパン・F	78
ワールド・バリュー・アロケーション B(H 無)	70

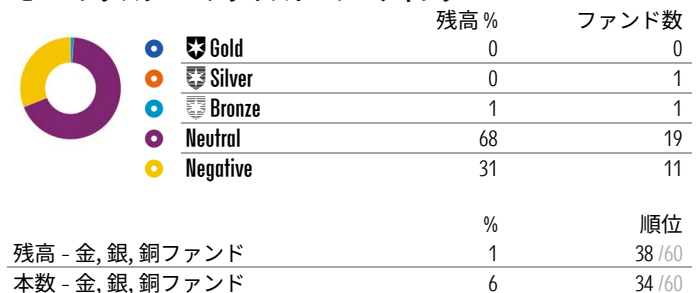
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	7 /37 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	18 /57 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	3 /12 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	8 /50 /60
投信: 平均運用期間 (年)	11.5
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	31	12 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

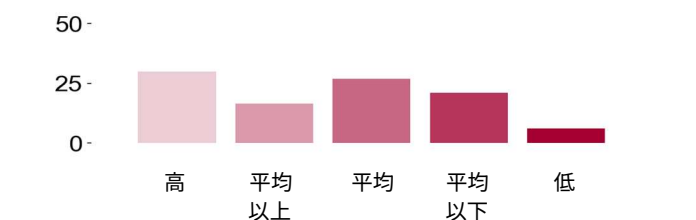
モーニングスター・レーティング平均	順位
3.1	21 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	39	33 /60
成功率 (5 年)	23	49 /60
成功率 (10 年)	8	44 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	順位
60	48 /60



イーストスプリング・インベストメンツ

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価 平均	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額		純資金流出率	
				運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
	8/25/2025	Claire Liang		783	27 /60	-6.1	41 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

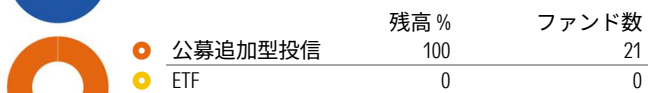
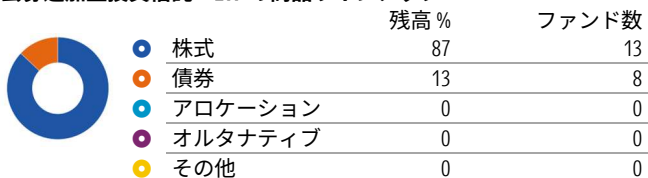
イーストスプリング・インベストメンツは近年、安定した基盤を築きつつあるものの、経営陣の継続的な交代は引き続き注視が必要である。同社の運用会社評価は引き続き「平均」とする。

同社は保険会社 Prudential Plc が全額出資するアジア拠点の資産運用会社であり、2024 年末時点の運用資産 2,580 億米ドルのうち約 58%を Prudential Plc 向けの運用が占めるなど、同社が主要顧客となっている。

2019 年以降、イーストスプリングは経営陣の交代が続いている。直近では、2025 年 7 月 1 日に、Rajeev Mittal 氏が Bill Maldonado 氏の後任として CEO に就任した。Mittal 氏はアジアおよび欧州で 30 年以上の運用経験を持ち、フィデリティ・インターナショナルのアジア部門責任者やパインブリッジのアジア太平洋地域 CEO を長年務めた実績がある。アジア市場における豊富な経験は同社の中核戦略にとって追い風となる一方、2024 年 6 月に就任した CIO の Vis Nayar 氏をはじめとする新任経営陣との協働がどの程度機能するかは、今後の見極めが必要である。現時点では、Mittal 氏の方針は前任者のビジョンと一致しており、運用パフォーマンスの向上と既存の能力を活用した成長を目指している。

運用チームの安定性は 2023 年以降改善しており、年間離職率は 2021 年と 2022 年の約 20%から 2023 年以降は約 10%に低下した。同社は、各戦略におけるアルファやトラッキングエラー目標の導入、運用プロセスの強化など、成果重視の企業文化を促進する取り組みを進めている。これにより、直近の株式および債券運用の短期的なパフォーマンスにおいて改善が見られている。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	83	18 /60

残高 (10 億円)

イーストスプリング・インド消費関連 F	273
イーストスプリング・インド株式オープン	241
イーストスプリング・インド・インフラ株 F	70
インド公益インフラ債券 F(毎月決算)	38
インド株式ファンド(3 ヶ月決算型)	33

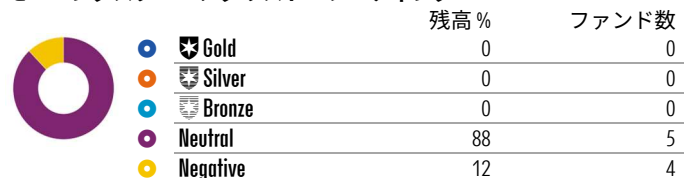
商品ラインアップの変化

商品タイプ	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	10 /44
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	5 /38
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	5 /22
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	7 /46
投信: 平均運用期間 (年)	11.6
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

ESG リスク低・平均以下のファンド	%	順位
	10	40 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



残高 - 金, 銀, 銅ファンド	%	順位
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	0	60 /60

パフォーマンス

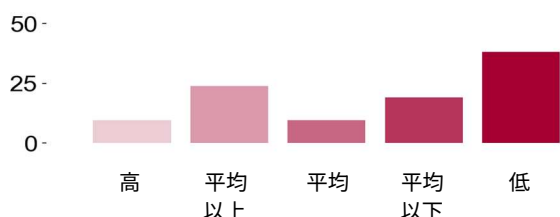
モーニングスター・レーティング平均	3.2	順位
		17 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	58	8 /60
成功率 (5 年)	29	38 /60
成功率 (10 年)	29	20 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	37	順位
		12 /60



HSBC アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価		平均	純資金流入額			純資金流出率		
評価日	10/31/2025		運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
アナリスト	Mara Dobrescu	日本	692	28 /60	-81.2	57 /60	-9.8	54 /60

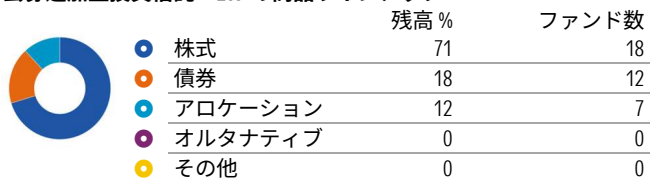
モーニングスター運用会社分析コメント

HSBC アセットマネジメントは、2019～21 年の経営陣の大幅な入れ替えを経て、現在は概ね安定している。2019 年に CEO に就任した、AXA IM や DWS での経験を有する Nicolas Moreau 氏と、2021 年に CIO に昇格した Xavier Baraton 氏は、運用力強化に向けた取り組みを進めている。運用チームの報酬体系を見直し、従来の裁量的かつ基準が定式化されていなかった仕組みを 1 年および 3 年のファンド運用実績に連動させた。これにより、投資家との利益の一致性は高まったものの、5 年などの長期指標を加えることで、より望ましい業界慣行に沿わせることができると考える。また同社はファンド全体でアクティブ・リスクをより取ることを推進し、ポートフォリオ・マネジャーに確信度の高い投資先への集中投資を促すとともに、過度にベンチマーク依存していた一部戦略を見直している。

従来の広範な商品ラインアップは徐々に重点分野に絞り込む方向にシフトしており、その一環として、2022 年に Contrast Capital から加わった Pierin Menzli 氏が率いるテーマ投資に注力している。同社はこれまでにメタバース戦略などを立ち上げており、今後も洗練されたテーマ型戦略の開発を進める計画である。しかし、テーマ型投資は長期的な運用において投資家にとって難しい場合があるため、慎重な見極めが必要である。一方で、ESG 戦略の新規立ち上げも継続しており、他の分野でのプロダクト整理を相殺している。また、ETF およびインデックスファンド事業は堅実に成長しているものの、欧州の大手競合と比べると規模はまだ限定的である。

過去 3 年間の取り組みは前向きだが、ファンド全体のパフォーマンス水準の改善にはまだつながっておらず、運用会社評価は引き続き「平均」とする。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	71	31 /60

	残高 (10 億円)
HSBC インド・インフラ株式オープン	312
HSBC インド オープン	115
HSBC ワールド・セレクション(安定成長)	27
HSBC ブラジル オープン	19
グローバルターゲット利回り債 F2023-02(限)	18

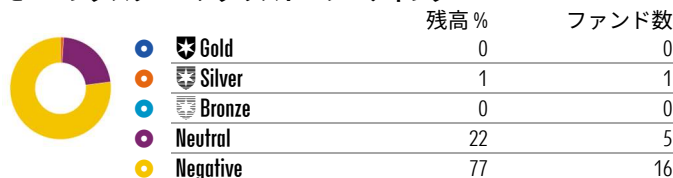
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	16 /49
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	0 /1
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	8 /36
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	6 /38
投信: 平均運用期間 (年)	10.2
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	20	27 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



残高 - 金, 銀, 銅ファンド	%	順位
	1	38 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド		
	5	36 /60

パフォーマンス

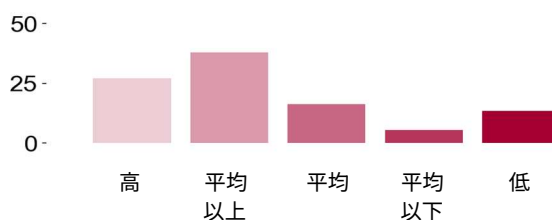
モーニングスター・レーティング平均	順位
2.4	51 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	30	45 /60
成功率 (5 年)	28	43 /60
成功率 (10 年)	19	32 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	順位
62	50 /60



ミレーアセット (Global X)

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価		平均	純資金流入額			純資金流出率		
評価日	10/16/2024		運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
アナリスト	Nehal Meshram	日本	562	29 /60	76.3	17 /60	18.4	10 /60

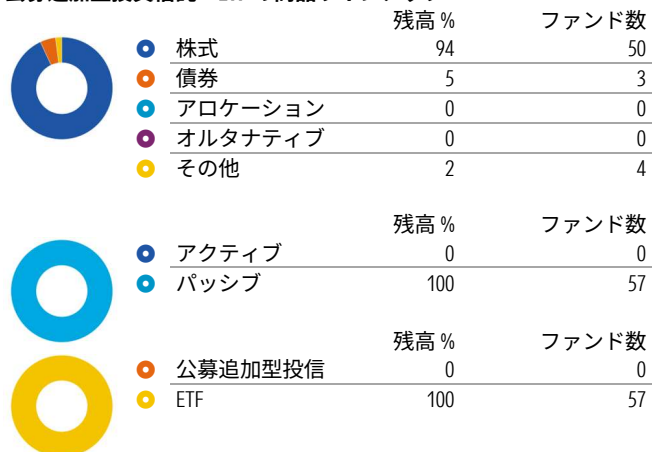
モーニングスター運用会社分析コメント

ミレーアセット・グローバル・インベストメンツは韓国の資産運用会社で、Hyeon Joo Park 氏が創設したミレーアセット FG の子会社として、アジア金融市場における主要プレーヤーの一つとなっている。同社は 2024 年 7 月時点で 2,750 億米ドルの資産を運用しており、そのうち 60%が韓国内に集中している。アジア太平洋地域における同社の中核的な公募ファンド事業は、協調的な組織構造、大規模な運用チーム、低い運用者離職率、競争力のある手数料体系、そして規律ある商品開発に支えられ、同業他社と比較して優れた運用者責任（スチュワードシップ）を実現している。一方で、総資産の 40%を占める ETF 事業は異なる性質を持ち、課題も浮き彫りになっている。

同社の ETF ラインアップはリスクの高いテーマ型戦略に偏重しており、短期的な資金獲得を意図しているように見える戦略が目立っている。最近経営陣の退任や組織再編、ETF の削減といった課題に直面したものの、19 本の ETF の清算は、短期的な資産集積や流行に依存した商品から脱却し、より商業的に持続可能で投資家志向の商品へとシフトする姿勢を示している。また、リーダーシップの交代が進む中でも、堅調な資金流入と新商品の成功が、同社の回復力を示している。

また、Global X の統合に伴い、運営はミレーアセットの管理方針に沿う形でより体系的・組織的になっており、ハンズオン型アプローチと整合している。最近では、後継者計画の一環として次世代リーダーシップを育成するための経営陣の若返りを目的とした役員人事の刷新も行われた。透明性や対応力に改善余地はあるものの、同社の業務安定性と成長へのコミットメントは十分であり、運用会社評価は引き続き「平均」とする。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	57	44 /60

残高 (10 億円)

グローバル X グローバル L-日本株式 ETF	109
グローバ X US テック・トップ 20 ETF	78
MSCI スーパーディビデンド-日本株式 ETF	59
グローバル X 半導体関連-日本株式 ETF	39
NASDAQ100・カバード・コール ETF	34

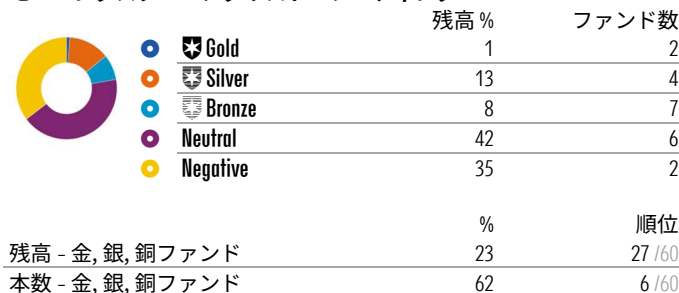
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	21
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	0
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	147
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	0
投信: 平均運用期間 (年)	0.0
ETF: 平均運用期間 (年)	2.5

サステナビリティ

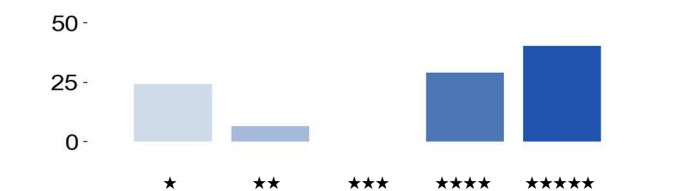
	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	20	27 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

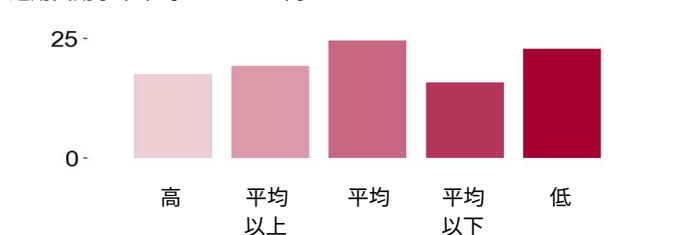
モーニングスター・レーティング平均	2.2	順位
		56 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	27	47 /60
成功率 (5 年)	50	13 /60
成功率 (10 年)	N/A	N/A /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	49	順位
		28 /60



スパークス・アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	高	純資金流入額			純資金流入率			
評価日	12/11/2025	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位	
アナリスト	柳 珠里	日本	513	33 /60	-32.5	51 /60	-6.8	49 /60

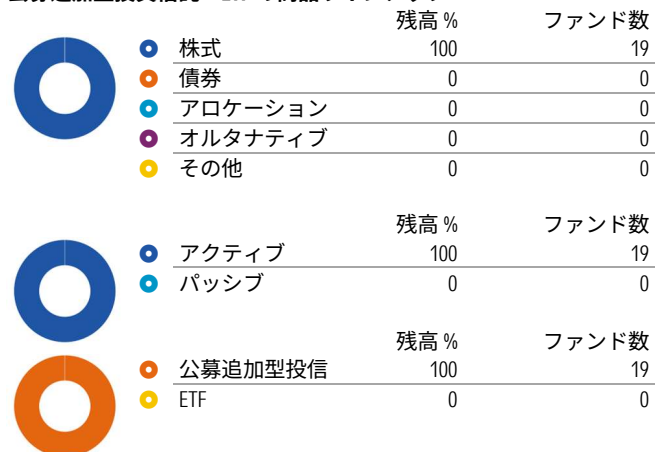
モーニングスター運用会社分析コメント

スパークス・アセット・マネジメントは、スパークス・グループ傘下にあり、日本初の独立系資産運用会社である。同社は 1989 年に経験豊富な投資家である阿部修平氏によって設立された。同社の投資哲学である「マクロはミクロの集積である」は、個別企業調査の積み上げに基づく運用プロセスを支える重要な基盤となっている。また、核となる運用能力（コア・コンピタンス）への一貫した注力と、運用商品ラインアップの拡張に対する慎重な姿勢を組み合わせることで、投資家に長期的な投資成果をもたらすことを重視している。

2025 年 10 月時点で、同社はグループ全体で 2.1 兆円超の資産を運用している。運用資産残高全体の約 7 割を占めるのは、4 つの戦略で構成される日本株式運用である。これらの戦略には、米国や欧州からの資金流入も多く、幅広い投資家層にサービスを提供している。同社は 20 名超の日本株式の投資プロフェッショナルのチームを有し、国内運用会社の中でも日本株式のアクティブ運用に注力する運用会社として際立つ存在である。多くのポートフォリオ・マネジャー（PM）は同社で長年キャリアを積んでおり、このような人材の安定性が、厳しい市場環境下でも投資スタイルの一貫性を高い水準で維持する基盤となっている。規律ある運用プロセス、自社で長年蓄積された企業調査のデータベース、そして長年の経験を持つ PM 陣が、同社の優位性を継続的に支えている。

同社の創業者であり、グループ CEO 兼 CIO である阿部氏に関して、長期的な明確な後継計画が示されていない点は、同社の将来的な戦略方向性という観点から懸念材料となる。ただし、同氏の運用面での関与はエンゲージメント戦略など一部に留まるため、この懸念が各運用戦略のポートフォリオ・マネジメントに影響することはない。一方、同社の運用費用水準は、運用体制の充実を反映した結果、国内の同業他社に比べて相対的に高く、これは投資家本位の姿勢を掲げる同社の行動とその両立が容易ではない側面である。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	92	11 / 60

残高 (10 億円)

スパークス・新・国際優良日本株ファンド	257
スパークス・厳選投資 F(野村 SMA・EW 向け)	130
スパークス・企業価値創造日本株ファンド	63
スパークス・M&S・ジャパン・ファンド	16
スパークス・厳選投資 F(確定拠出年金向け)	10

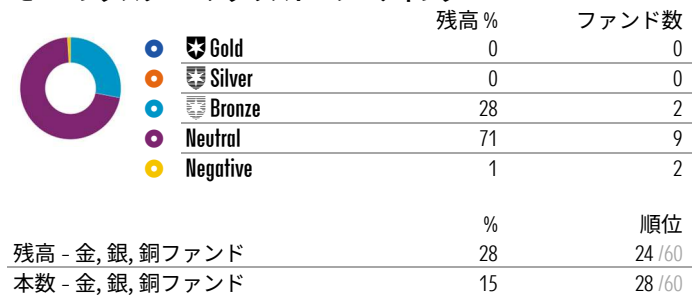
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	0
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	17
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	3
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	6
投信: 平均運用期間 (年)	12.6
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	22	25 / 60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

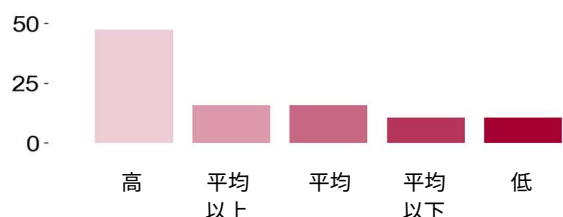
モーニングスター・レーティング平均	順位
3.3	11 / 60



	%	順位
成功率 (3 年)	37	35 / 60
成功率 (5 年)	22	50 / 60
成功率 (10 年)	58	4 / 60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	順位
69	56 / 60



フランクリン・テンプレートン

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価		平均	純資金流入額			純資金流出率		
評価日	4/1/2025		運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
アナリスト	Max Curtin	日本	399	38 /60	31.2	27 /60	8.8	20 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

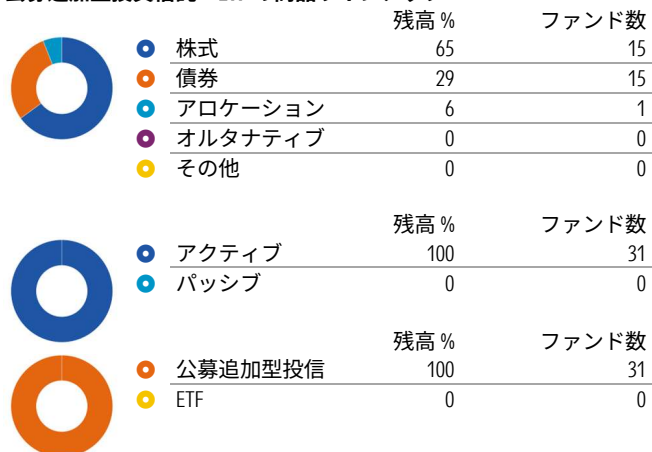
フランクリン・テンプレートンは競争の激しい運用業界で商品ラインアップを拡充しているが、直近の変化を踏まえ、運用会社評価は引き続き「平均」を維持する。

同社はこれまで買収を通じて独立性の高い運用チームを構築してきた実績があり、2024 年末時点で運用資産総額は 1.6 兆米ドルに達した。直近では 2024 年 1 月にパトナム・インベストメンツを買収し、リタイアメント市場へのアクセスを強化するとともに、資産クラス、販売チャネル、投資手段の多様化を進めている。

同社はオルタナティブ資産への取り組みも明確である。2012 年にヘッジファンド専門の K2 アドバイザーズを加えた後、2019 年から 2022 年にかけてプライベート・クレジット、プライベート不動産、プライベート・エクイティのセカンダリーズ（二次市場）の分野を拡大し、オルタナティブ投資の運用資産総額は 2019 年の 7%から 2024 年には 15%に倍増した。

一方で、同社はこれまで買収した運用チームに対して比較的自由を与える方針を取ってきたが、近年は影響力を強めつつある。たとえば、全ての公募向けの運用チームがブラックロックの Aladdin プラットフォームを採用する予定であり、2020 年のレグメイソン買収で得たマーティン・カーリー・ブランドを廃止する動きも進んでいる。また、公募チームの報酬体系を標準化し、レグメイソンのクオンツ型マルチアセット戦略とパトナムの債券チームをそれぞれ統合した。これらの施策はいずれも合理的だが、同社の運営方針における変化の兆しを示している。一方で、元ウエスタン・アセットの共同 CIO 兼ポートフォリオマネージャーである Ken Leech 氏に関連する法的な問題は未解決のままであり、この影響や主力のコアおよびコアプラス債券戦略の低調なパフォーマンスを受け、同部門では大規模な資金流出が続いている。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	64	38 / 60

残高 (10 億円)

オーストラリア高配当株ファンド(毎月分配)	111
アメリカ高配当株ファンド(毎月分配型)	47
アメリカ高配当株ファンド(年 2 回決算型)	35
アメリカ地方債ファンド(為替ヘッジなし)	31
オーストラリア毎月分配型ファンド	31

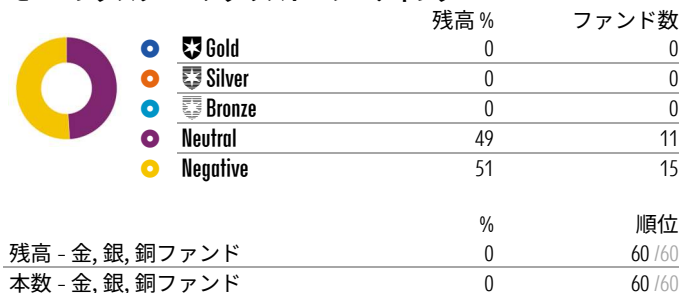
商品ラインアップの変化

		順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	0	1 / 60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	11	51 / 60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	2	10 / 60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	7	45 / 60
投信: 平均運用期間 (年)	12.6	
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0	

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	41	5 / 60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

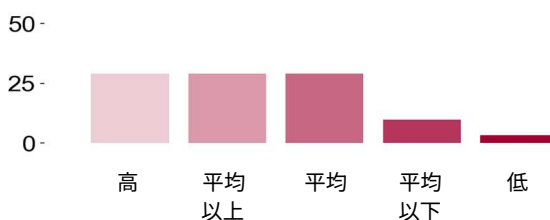
モーニングスター・レーティング平均	2.7	順位
		43 / 60



	%	順位
成功率 (3 年)	36	36 / 60
成功率 (5 年)	35	29 / 60
成功率 (10 年)	23	27 / 60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	63	順位
		51 / 60



ステート・ストリート

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均以上	純資金流入額		純資金流出率	
		直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
評価日	7/16/2025				
アナリスト	Brendan McCann				
日本		運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
		376	39 /60	32.4	26 /60
				11.4	17 /60

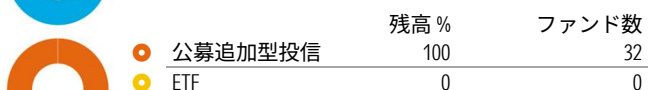
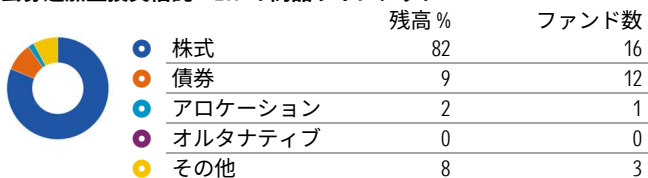
モーニングスター運用会社分析コメント

ステート・ストリート・インベストメント・マネジメントは、未開拓の分野に挑戦する一方で、低コスト商品は依然として競争力が強く、運用会社社評価を「平均以上」とする。同社は 2025 年 6 月に、ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズから現在の名称にブランドを変更し、新ロゴを導入した。これは他のステート・ストリート商品との一貫性を高め、投資家にとっての明確性を向上させることを目的としており、投資哲学や運用戦略、また経営陣に変更はない。

2022 年に CEO に就任した Yie-Hsin Hung 氏は、商品開発のスピード向上を推進している。2024 年には Anna Paglia 氏を最高ビジネス責任者に、2025 年には Mark Alberici 氏を初のプロダクト・イノベーション担当責任者に任命した。同社は 2024 年末から 2025 年初めにかけて、アポロやギャラクシー・アセット・マネジメントとの提携を通じ、ユニークかつテーマ性のある ETF を相次いで立ち上げた。特に、プライベートクレジット ETF は、ETF 構造にプライベート資産を初めて組み込んだ製品であり、流動性制約への対応が注目される。また、ギャラクシーとの協働による ETF はブロックチェーンやデジタル資産に焦点を当てている。

これらの新しい戦略は、同社の運用資産総額 1.7 兆米ドルの大部分を占めるコア ETF に比べ、リスクが高くニッチな分野だが、同社の堅実なキャピタルマーケティング部門とリスク管理チームにより十分にサポートされている。同社は、短期投資家による急激な資金流入にも対応できる能力に長けており、新たな流動性の課題にも適切に対処できると考えられる。また、同社は引き続き価格競争力を維持しており、全シェアクラスの約 90% が平均以下の経費率となっている。さらに、2023 年第 4 四半期の運用費用引き下げにより、2025 年 3 月までに投資家に 6,000 万米ドル超の費用引き下げメリットをもたらしたと見積もられる。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	82	20 /60

	残高 (10 億円)
米国株式インデックス・ファンド	162
DC 外国株式インデックス・オープン	48
外国株式インデックス・オープン	37
全世界株式インデックス・ファンド	34
ゴールドファンド(為替ヘッジあり)	27

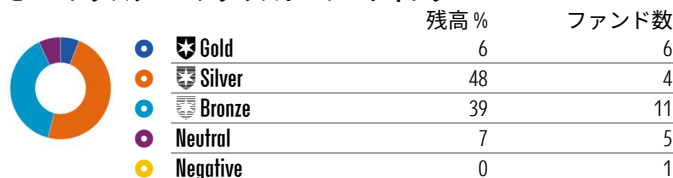
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	7 /38
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	0 /1
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	9 /41
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	3 /25
投信: 平均運用期間 (年)	8.6
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	17	32 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



	%	順位
残高 - 金, 銀, 銅ファンド	93	4 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	78	4 /60

パフォーマンス

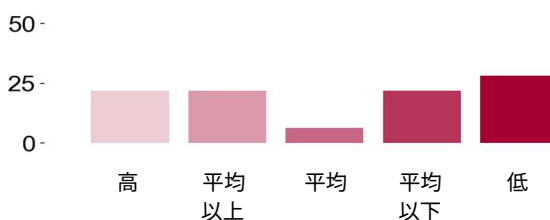
モーニングスター・レーティング平均	3.8	順位
		4 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	60	7 /60
成功率 (5 年)	52	12 /60
成功率 (10 年)	44	9 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	48	順位
		23 /60



UBS アセット

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

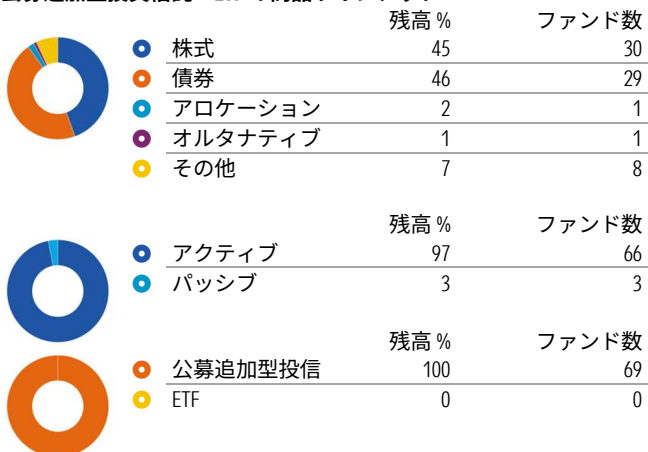
運用会社評価 平均	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額		純資金流出率	
				運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
	1/15/2025	Natalia Wolfstetter		309	41 /60	1.5	37 /60
						0.5	35 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

UBS アセットマネジメントは、2023 年 3 月に UBS グループがクレディスイスの資産運用部門を買収後、統合プロセスを現在も進めている。買収により規模の拡大が実現した一方、双方の事業領域は広範であり、新たな運用テクノロジー基盤の構築計画も含め、統合には多くの課題が伴う。統合作業は経営陣・現場双方の大きな負担となっており、少なくとも 2026 年末までは続く見通しだ。もっとも、同社は 10 年以上にわたり体制の見直しを進めてきており、現在は運営基盤が大きく改善している点は安心材料である。この改革過程では経営陣や運用部門で離職率が高まったが、近年は安定している。一方、買収後は旧クレディスイス AM の人員において離職率が高まっている。統合プロセスの影響を見極めつつ、同社の運用会社評価は引き続き「平均」とする。

同社は、プライベート市場やオルタナティブ投資、カスタム・インデックス、アジア市場などの重点領域と商品提供体制の一層の連携を図っている。買収によりテーマ型株式、コモディティ、ハイイールド債券、レバレッジローンなどの分野で補完的な能力を得た一方、他の分野では重複も大きく、運用商品統合による整理を進めている。このような整理を進めつつも、同社は引き続き、伝統的資産からオルタナティブ資産まで幅広いアクティブおよびパッシブ戦略を提供している。同社の提供する戦略の総合的な水準は概ね堅調で、特にパッシブ戦略（2024 年末時点で総資産の 48%）が全体を押し上げているが、アクティブ戦略の品質にはばらつきがある。ポートフォリオ・マネジャーのボーナスは最大 3 年間のパフォーマンスに連動しているが、長期的な成果も評価に織り込むことで、よりバランスの取れた制度になると考えられる。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	41	54 /60

残高 (10 億円)

世界公共インフラ債券投信(通選)円(毎月)	43
オーストラリア債券オープン(毎月分配型)	34
グローバル株式厳選投資 F B(投資一任)	19
UBS 次世代テクノロジー・ファンド	18
UBS 中国新時代株式ファンド(年 1 回決算型)	11

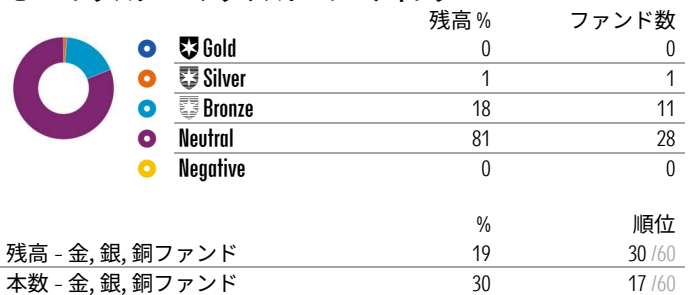
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	1 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	29 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	29 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	28 /60
投信: 平均運用期間 (年)	10.6
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	39	8 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

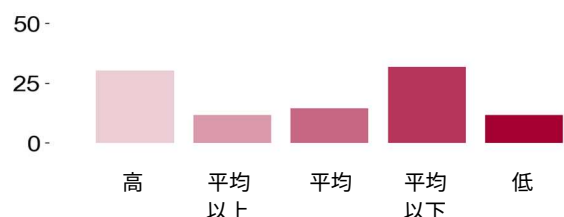
モーニングスター・レーティング平均	2.9	順位
		32 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	41	29 /60
成功率 (5 年)	29	42 /60
成功率 (10 年)	37	16 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	54	順位
		34 /60



パインブリッジ・インベストメンツ

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

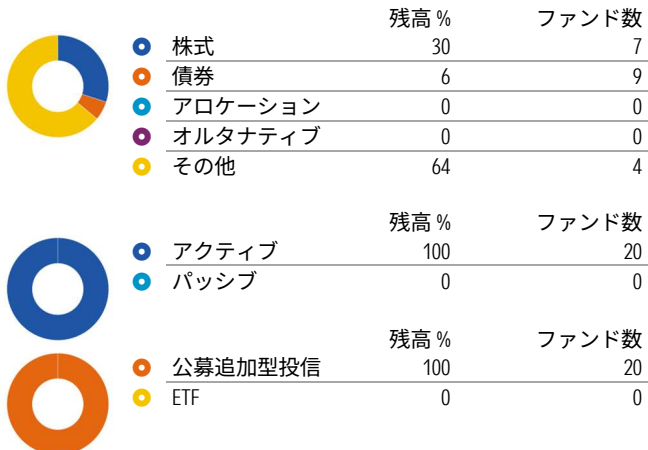
運用会社評価		平均		純資金流入額		純資金流出率		
評価日	1/21/2025	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位	
アナリスト	Morningstar Manager Research	日本	191	45 /60	-45.8	53 /60	-19.4	59 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

パインブリッジは、多様な資産を運用する運用会社であり、2024 年 9 月時点で約 1,000 億米ドルの運用資産残高を有する。同社はもともと AIG の投資部門として設立され、2010 年にパシフィック・センチュリー・グループ (PCG) に買収された。また、2024 年 12 月 23 日、米国の大手保険会社メットライフの資産運用部門であるメットライフ・インベストメント・マネジメント (メットライフ IM) が同社の買収を発表した。この取引は規制当局の承認を条件としており、本取引は 2025 年に完了する見込みである。PCG はプライベート・エクイティ事業と華泰・パインブリッジ合併事業を維持する。

メットライフ IM は、パブリック債券、プライベート・キャピタル、不動産に特化しており、パインブリッジのアジア債券・株式およびグローバル・マルチアセットの専門性を活用できる。一方で、買収がパインブリッジの約 230 名の運用チームや既存の商品ラインアップに与える影響は今後の見極めが必要である。同社は、2016 年の CEO 就任以降、経営・財務・テクノロジー・リスク担当役員の交代など高い人事流動性が続いた時期を経て、経営陣の安定性はある程度回復しているものの、直近では運用チームの離職率がやや高まっている。2023 年には約 10 年ぶりに黒字転換を果たしたものの、チームの安定性やプロダクトの持続性には課題が残ることから、同社の運用会社評価は引き続き「平均」とする。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	91	14 /60

	残高 (10 億円)
パインブリッジ・キャピタル証券 F(H 無)	68
パインブリッジ・キャピタル証券 F(H 有)	51
グローバル・テクノロジー・インフラ F	27
パインブリッジ厳選インド株式ファンド	20
パインブリッジ・ワールド株式・オープン	8

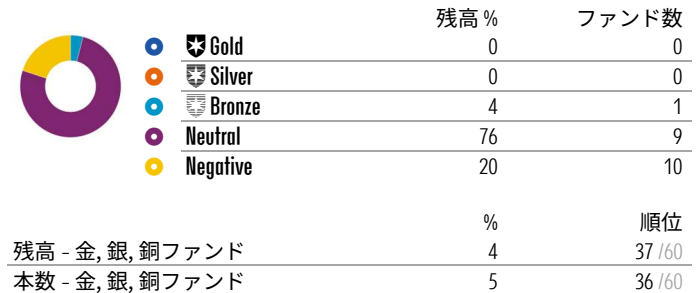
商品ラインアップの変化

		順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	0	1 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	0	1 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	4	19 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	12	56 /60
投信: 平均運用期間 (年)	13.5	
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0	

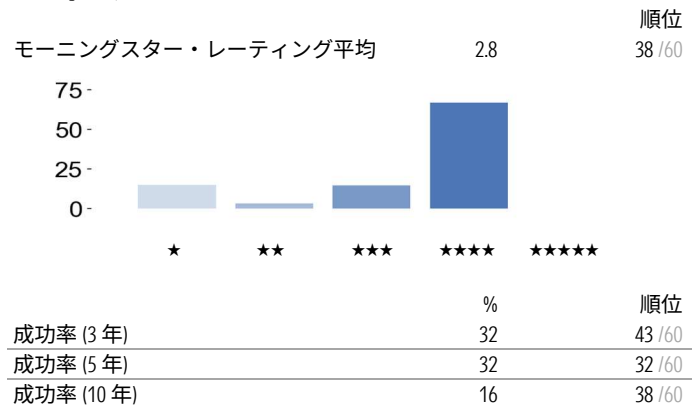
サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	N/A	N/A /60

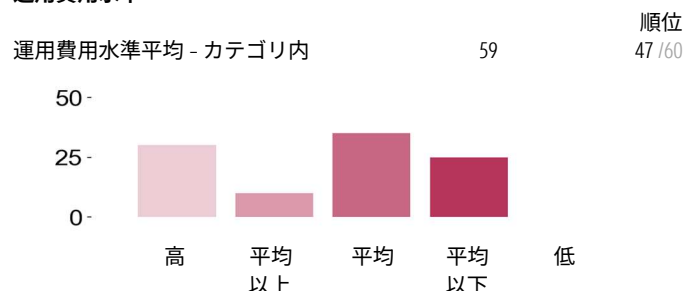
モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス



運用費用水準



BNY メロン・インベストメント

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価 平均	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額		純資金流出率	
				運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
	4/10/2025	Alyssa Stankiewicz		184	46 /60	-10.3	43 /60
						-6.3	47 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

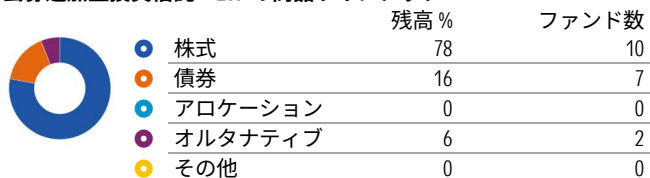
新たな経営体制のもとで部門間の連携強化に取り組む BNY インベストメントの運用会社評価を、引き続き「平均」とする。

同社は多角的金融機関であるバンク・オブ・ニューヨーク・メロンの資産運用部門であり、2024 年 12 月時点で長期運用資産は約 1.5 兆米ドルに達する。6 つの完全子会社の資産運用会社がこれらの資産を管理している。さらに約 4,000 億ドルのマナーマーケット子会社ドレイファスも有するが、各社は比較的独立して運営されている。しかし、2024 年末に CEO に就任した Jose Minaya 氏は、この分断された構造の統合を進める意向だ。Minaya 氏はヌビーンで約 20 年のキャリアを積み、同社の CEO として 4 年以上務めた後、BNY に加わった。

Minaya 氏の前任者である Hanneke Smits 氏は、BNY のアクティブ債券および株式運用能力をそれぞれインサイトとニュートンに統合することで、分散した運用子会社の統合プロセスを開始していた。Minaya 氏はこの流れを引き継ぎ、バックオフィス機能の統合や組織のフラット化を推進している。2025 年 3 月にニュートンの CEO である Euan Munro 氏および共同 CIO の Mitesh Sheth 氏が退任したことに伴い、同社 CIO の John Porter 氏が Minaya 氏の統括下に入り、ニュートンの営業およびオペレーションチームは BNY の各機能部門の責任者の下で業務を行うこととなった。また、2025 年 1 月には、地域別の営業責任者がそれぞれ Minaya 氏に報告する体制に移行し、同時に、1,350 億米ドルを運用するウェルスマネジメント部門も、前任の責任者である Catherine Keating 氏の退任を受けて、Minaya 氏の指揮下に入った。

多様な資産クラスと企業文化を持つ子会社の統合は容易ではない。ウォルター・スコットは、リサーチ重視のアプローチと高い従業員定着率、整合性の取れた報酬体系で際立っている。一方で、ニュートンは運用資産残高や資金流入に基づく報酬制度を採用しており、業界のベストプラクティスには及ばない面がある。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	72	30 /60

	残高 (10 億円)
モビリティ・イノベーション・ファンド	73
インサイト・G・クレジット F B(SMA・EW)	18
米国製造業株式ファンド	17
日本復活成長株ファンド	12
日本中小型成長株アクティブ・ファンド	11

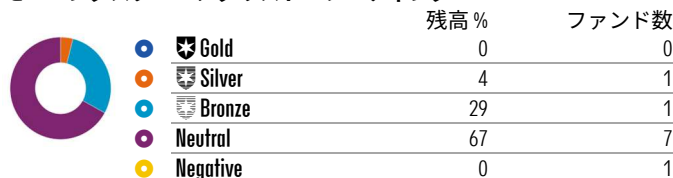
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	0 /1 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	14 /53 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	9 /39 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	11 /53 /60
投信: 平均運用期間 (年)	8.2
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	43	4 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



	%	順位
残高 - 金, 銀, 銅ファンド	33	21 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	20	23 /60

パフォーマンス

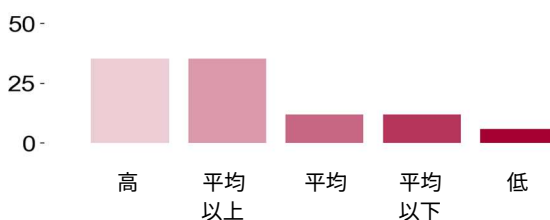
モーニングスター・レーティング平均	2.9	順位
		34 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	53	13 /60
成功率 (5 年)	24	47 /60
成功率 (10 年)	15	39 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	65	順位
		53 /60



マニユライフ・インベストメント

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価		平均以上		純資金流入額		純資金流入率	
評価日	1/15/2025	運用資産残高	順位	直近 1 年	順位	直近 1 年	順位
アナリスト	Morningstar Manager Research	日本	175	47 /60	-51.4	54 /60	-22.7

モーニングスター運用会社分析コメント

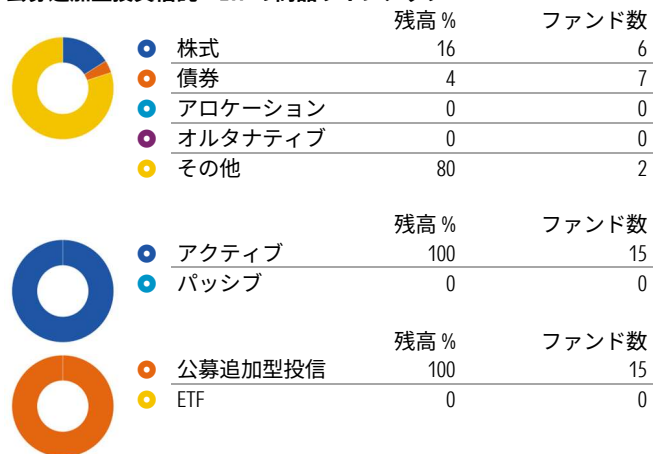
マニユライフ・インベストメント・マネジメントは、世界各地域においてベストプラクティスを浸透させており、運用会社評価を引き続き「平均以上」とする。

カナダ拠点の保険会社マニユライフ・ファイナンシャルの資産運用部門である同社は、4 大陸にわたる世界的なネットワークを確立しており、2024 年 9 月時点で 1 兆カナダドルを超える運用資産残高を有する。同社は、運用部門とおよびウェルス・マネジメント部門を単一のグローバルな部門に統合し、市場をまたいだ部門間の連携を強化した。個人向け、年金・リタイアメント向け、機関投資家向けの 3 つのチャネルを横断するグローバルチームが各地域のビジネス責任者をサポートし、地域の特定のニーズを考慮しながら、それぞれの市場でベストプラクティスが実行されるようにしている。

再編に伴い、2023~24 年には業務の重複を解消するための人員削減が行われた。運用部門も例外ではなく、弱点の補強やチーム間のコミュニケーション改善を目的とした施策が実施された。2023 年 12 月には、長年勤務したベテランである Chris Conkey 氏退任に伴い、パブリック・マーケットの CIO に Colin Purdie 氏が就任し、ポートフォリオ構築やリスク管理への注力が一層強化され、チーム間の協力体制もさらに向上した。

マネジャーリサーチは依然として同社の強みであり、企業の系列に関わらず優秀な運用者を優先する姿勢を長年維持している。米国ではジョン・ハンコック・ファンドのラインアップにおいてはサブアドバイザーを積極的に活用しており、カナダ拠点では長年にわたるマーワーとの提携がラインアップの補完に寄与している。アジアでは主に社内チームを活用しており、一部の人員入れ替わりはあったものの、全体として堅実な運営体制を維持している。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	95	8 /60

残高 (10 億円)

円ハイブリッド債券インカム F(年 1 回決算)	90
円ハイブリッド債券インカム F(3 ヵ月決算)	50
マニユライフ・米国銀行株式ファンド	13
マニユライフ・米国銀行株式 F(資産成長型)	7
マニユライフ・新グローバル配当株 F(毎月)	5

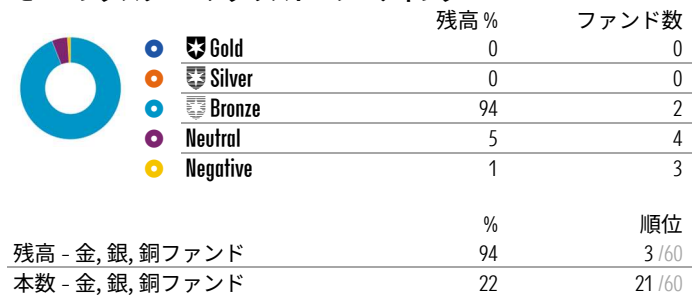
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	1 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	52 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	9 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	58 /60
投信: 平均運用期間 (年)	9.3
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	N/A	N/A /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



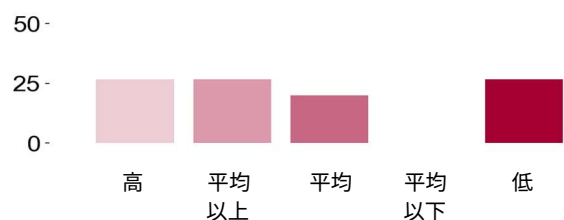
パフォーマンス

モーニングスター・レーティング平均	2.9	順位
		33 /60



運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	56	順位
		43 /60



シュローダー・インベストメント

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均以上	評価日	アナリスト	日本	純資金流入額		純資金流出率	
					運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
		7/15/2024	Lena Tsymbaluk		151	49 /60	-22.5	50 /60
							-14.6	57 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

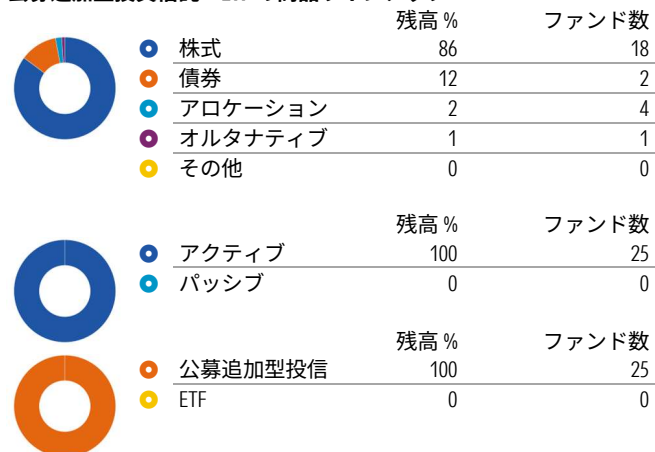
シュローダーは、英国に上場している英国に本社を置く老舗の多角的な資産運用会社である。2024 年 3 月末時点での運用資産総額 (AUM) は 7,500 億ポンドに達する。同社はパブリック・プライベート双方の市場で幅広い専門性を有し、欧州、アジア太平洋、米州で大規模な事業を展開している。地域別の AUM 分布では、英国市場が全体の 49% を占めており、続いてアジアが 25%、EMEA が 14% となっている。

同社は、伝統的に強みを持つ株式運用に加え、マルチアセット戦略、ソリューション、プライベート資産、オルタナティブ投資などへ段階的に事業を多角化している。この多角化は、戦略的買収や提携によって実現されており、2021 年のリバー・アンド・マーカントの英国ソリューション事業の買収や、2022 年 4 月の欧州再生可能エネルギーインフラ運用会社グリーンコート・キャピタルの過半数の株式取得がその例である。2022~24 年には、Global Equity Impact、Greencoat Global Renewables、Private Equity China など、買収で得た専門知識を活かした戦略的かつ重点的な新規商品を導入し、成長領域での能力拡張へのコミットメントを示している。

同社は、業界平均を上回るファンドマネジャーの定着率を誇り、多くのチームの責任者が同社でキャリアを築いている。さらに、人材層も厚く効果的な後継者育成計画が可能となっている。報酬制度も定着を促す構造となっており、ファンドマネジャーの変動報酬の約 4 割から 6 割が 3 年半かけて段階的に支給されることにより、長期的利益との整合性を保ちつつ、社員の定着を促している。

リスク管理においては、2017 年にブラックロックの Aladdin プラットフォームを導入し、リスク管理フレームワークを統合的に強化した。同族経営の伝統に根ざした長期的戦略計画は協働的な企業文化を醸成し、高い従業員定着率を支えるとともに、投資家にとっても良好な成果をもたらしている。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	55	46 /60

残高 (10 億円)

シュローダー日本ファンド(確定拠出年金)	23
シュローダー・エマージング株式 F(1 年決算)	18
シュローダー年金運用ファンド日本株式	17
シュローダー日本ファンド(野村 SMA・EW 向け)	13
シュローダー DC アクティブ 外国株式	13

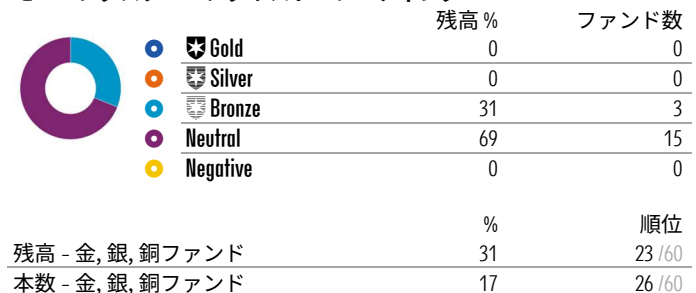
商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	1 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	59 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	16 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	42 /60
投信: 平均運用期間 (年)	14.9
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

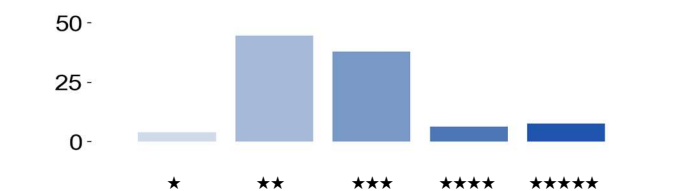
	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	6	43 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



パフォーマンス

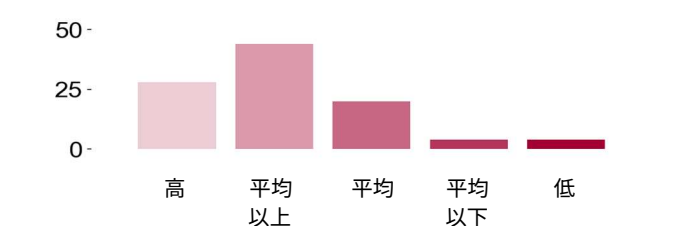
モーニングスター・レーティング平均	2.7	順位
		42 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	27	49 /60
成功率 (5 年)	26	45 /60
成功率 (10 年)	12	42 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	68	順位
		55 /60



ラッセル・インベストメンツ

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価 平均	評価日	アナリスト	日本	運用資産残高		純資金流入額		純資金流入率	
				103	順位 52 /60	直近 1 年 1.5	順位 36 /60	直近 1 年 1.8	順位 33 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

ラッセル・インベストメンツは、ここ数年の組織再編を経つつも核となる戦略を維持している。運用会社評価は引き続き「平均」とする。

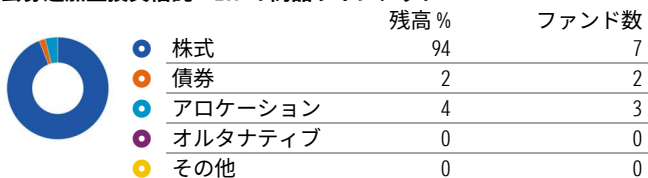
同社は 2016 年以降プライベート・エクイティの傘下にあり、幹部レベルでの人事異動が続いている。前 CEO の Michelle Seitz 氏は 5 年間在任の後、2022 年に退任し、ブラックロックで 15 年の実績を持つ Zach Buchwald 氏が、2023 年 5 月に会長兼 CEO として就任した。また、2021 年にはゴールドマンサックスで 16 年のキャリアを持つ Kate El-Hillow 氏が社長兼 CIO として加わった。両名を支える幹部は外部採用と既存社員が混在している。2024 年には、オルタナティブ運用部門のグローバル責任者として Ayesha Parra 氏が外部から採用された一方、21 年の同社歴を持つポートフォリオ

マネジメント部門責任者 Jon Eggins 氏のような長年の社内人材も引き続き重要な役割を果たしている。

リーダーシップ層の変更にもかかわらず、同社は引き続き、マネジャー選定力を基盤とした、優れたアウトソース型 CIO サービスモデルとマルチマネジャー・ファンドのラインアップを提供している。このプロセスでは、外部の資産運用会社を活用する一方で、内部運用チームによるポートフォリオ最適化も行うという独自のアプローチに基づいているが、ファンドの長期的なパフォーマンスはまちまちである。

同社は、アクティブ ETF やオルタナティブファンドなど成長分野への投資を進めている。大株主の TA Associates や少数株主は将来的に持分を売却する可能性があるが、現時点で具体的な動きは見られない。なお、従業員は約 15% の持株比率を有している。

公募追加型投資信託・ETF の商品ラインアップ



残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	94	9 /60

残高 (10 億円)

ラッセル・インベストメント外国株式 F(DC)	73
ラッセル・インベストメント日本株式 F(DC)	15
ラッセル・世界環境テクノロジー・ファンド	4
ラッセル・グローバル・バランス 安定成長	3
ラッセル・国内株式マルチ・マネージャーF	2

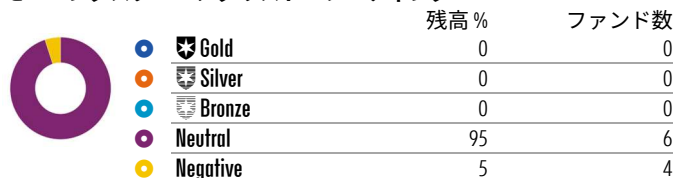
商品ラインアップの変化

商品	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	1 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	1 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	1 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	23 /60
投信: 平均運用期間 (年)	14.9
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

ESG リスク低・平均以下のファンド	%	順位
	9	41 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング



残高 - 金, 銀, 銅ファンド	%	順位
	0	60 /60
本数 - 金, 銀, 銅ファンド	%	順位
	0	60 /60

パフォーマンス

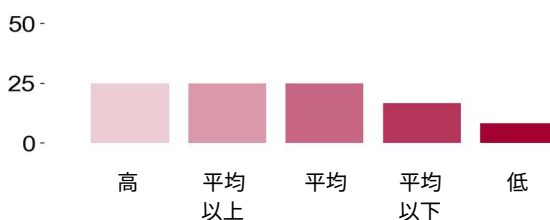
モーニングスター・レーティング平均	3.4	順位 10 /60
-------------------	-----	-----------



成功率 (3 年)	%	順位
	67	3 /60
成功率 (5 年)	%	順位
	50	13 /60
成功率 (10 年)	%	順位
	40	13 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	55	順位 37 /60
------------------	----	-----------



コモンズ投信

ファンド運用資産残高 (単位: 10 億円)

運用会社評価	平均以上	評価日	アナリスト	Morningstar Manager Research	日本	純資金流入額		純資金流入率	
						運用資産残高	順位	直近 1 年	順位
		6/27/2024				89	54 /60	7.3	34 /60
								9.9	19 /60

モーニングスター運用会社分析コメント

長期投資の姿勢と投資家第一主義を貫くコモンズ投信に「平均以上」の運用会社の評価を付与する。

コモンズ投信は、渋澤健氏を含む豊富な経験を持つ9名の共同創業者により、長期投資に共感した人たちが寄り集えるコモン・グラウンド（共有地）を目指し、2007年に設立された。以来、独立系運用会社として外部の意向や方針や資本関係などに縛られることなく、優良な投資哲学を構築し、長期投資と投資家第一主義の思いを主に直接販売を通じて投資家に伝えてきた。代表取締役社長（CEO）の伊井哲朗氏は得意な分野で勝負することが重要だと考えており、現在はコモンズ 30 ファンドとザ・2020 ビジョンが個人投資家向けの主力商品として運用されている。これは目先を次々と変え投資商品を多く設定してきた従来の大手運用会社と大きく異なる。現在は直接販売に加え、厳選された販売会社を通じてより多くの一般投資家に投資信託を販売しており、2024 年 4 月の運用資産残高は 1,121 億円に到達している。

将来的な継続性を意識し、チームでの運用体制が取られているが、後継者リスクとキーパーソンリスクは比較的高いと考える。2007 年の創業以来、CEO として同社の成長を牽引してきた伊井氏は、現在、最高運用責任者（CIO）とポートフォリオ・マネジャーも兼任している。長期投資を貫く運用会社として同社の投資哲学をより体現するためにも、将来的な運用体制や後継者の育成計画などの具体的なプランを策定することは必至と思われる。

公募追加型投資信託・ETFの商品ラインアップ

	残高 %	ファンド数
株式	100	4
債券	0	0
アロケーション	0	0
オルタナティブ	0	0
その他	0	0

	残高 %	ファンド数
アクティブ	100	4
パッシブ	0	0

	残高 %	ファンド数
公募追加型投信	100	4
ETF	0	0

残高上位ファンド

残高上位 5 ファンド	残高 %	順位
	100	1 /60

	残高 (10 億円)
コモンズ 30 ファンド	73
ザ・2020 ビジョン	10
まあいい未来共創ファンド cotocoto	3
コモンズ 30+しずぎんファンド	2
	N/A

商品ラインアップの変化

	順位
投信・ETF 新規設定率 (%、1 年)	50 /60
投信・ETF 償還率 (%、1 年)	0 /60
投信・ETF 新規設定率 (%、5 年)	10 /60
投信・ETF 償還率 (%、5 年)	0 /60
投信: 平均運用期間 (年)	10.0
ETF: 平均運用期間 (年)	0.0

サステナビリティ

	%	順位
ESG リスク低・平均以下のファンド	25	18 /60

モーニングスター・メダリスト・レーティング

	残高 %	ファンド数
Gold	0	0
Silver	12	1
Bronze	88	2
Neutral	0	0
Negative	0	0

	%	順位
残高 - 金、銀、銅ファンド	100	1 /60
本数 - 金、銀、銅ファンド	100	1 /60

パフォーマンス

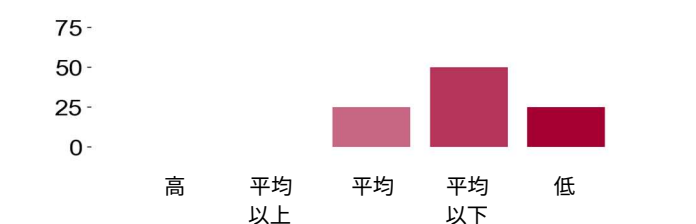
モーニングスター・レーティング平均	2.3	順位
		53 /60



	%	順位
成功率 (3 年)	33	41 /60
成功率 (5 年)	33	31 /60
成功率 (10 年)	33	19 /60

運用費用水準

運用費用水準平均 - カテゴリ内	31	順位
		7 /60



付録

付録では、運用会社ファクトシートに記載されているデータ項目と、その計算方法について詳述する。本レポートでは、各運用会社の公募追加型投資信託とETFのみを対象としている。短期金融資産のみに投資するファンドおよびその他の運用商品は除外している。

ファクトシートには残高上位60社中における各運用会社の順位が示されている。多くの順位は、優れているものから劣っているものへの順に示されている。ただし、運用資産残高や資金流入額のように、グループ内で最大から最小への順に示される場合もある。

すべてのデータは2025年9月30日時点のものである。ただし、運用会社評価については、ファクトシートに記載されている評価日時点のものである。

モーニングスターのレーティングとパフォーマンス

モーニングスターは資産運用会社の調査を実施し、**運用会社評価**および**モーニングスター・メダリスト・レーティング**を付与している。これらの評価は、各運用会社とそのファンドに対するモーニングスターのマネジャー・リサーチ部門の見解を示すものである。

- ▶ 運用会社評価は、高評価から低評価への順番で、**高 (High)**、**平均以上 (Above Average)**、**平均 (Average)**、**平均以下 (Below Average)**、**低 (Low)** の5段階評価で示される
 - ▶ **モーニングスター運用会社分析コメント**は、運用会社が投資家本位の姿勢をどの程度保ち、運用を中心とした企業文化を維持しているかについてのモーニングスターの見解を記載したものである。
 - ▶ 一部の運用会社のモーニングスター運用会社分析コメントは、1ページに収まるよう、原文を編集して掲載している。編集前の分析コメント全文は、モーニングスターのサービスまたは製品上の「モーニングスター運用商品レポート」にて確認いただける。なお、外資系運用会社の場合、コメントは英語の原文を翻訳したものであるため、英語の原文に記載の内容が優先される。
 - ▶ **評価日**は、運用会社に対する最新の運用会社評価公表日を示している。
 - ▶ 担当アナリストが異動や退職等でモーニングスターのマネジャー・リサーチ部門から離任している場合、**アナリスト欄**には「Morningstar Manager Research」と表示される。

- ▶ **モーニングスター・メダリスト・レーティング**は、高評価から順に、**金 (Gold)**、**銀 (Silver)**、**銅 (Bronze)**、**中位 (Neutral)**、**下位 (Negative)** の5段階で示される。
 - ▶ メダリスト・レーティングは、運用費用がファンドのパフォーマンスに直接影響するため、運用費用の違いを考慮している。グローバルではシェアクラス・レベルで付与されるが、日本ではシェアクラスの概念がないため、ファンド・レベルで付与される。
- ▶ 運用会社の総運用資産残高に占める、メダリスト・レーティング各評価段階の割合の詳細は、チャートの横に示している。
- ▶ **モーニングスター・レーティング**は、モーニングスター・カテゴリ内でファンドのリスク調整後リターンを正規分布に基づいて評価するものである。上位 10%のファンドが5つ星、下位 10%が1つ星を獲得する。付与には最低3年間の運用実績が必要である。
- ▶ 運用会社のモーニングスター・レーティング平均は、当該運用会社が提供するすべてのファンドの総合モーニングスター・レーティングの単純平均である。
- ▶ 運用会社の総運用資産残高に占める、モーニングスター・レーティング各評価段階の割合の詳細は、チャートの下に示している。
- ▶ **成功率**は、計測期間において償還や併合をせずに存続し、かつカテゴリ内で上位半分以上の運用実績を残したファンドの割合を示している。
- ▶ 計測期間の開始時点で運用されていたが、期間終了前に償還されたファンドは、不成功としてカウントされる。
- ▶ 存続したが、運用費用控除後のリターンがカテゴリ内の中央値を下回ったファンドは、不成功としてカウントされる。
- ▶ 計測期間の開始後に設定されたファンドは、計算には含まれない。

運用資産残高

運用会社ファクトシートには、日本籍ファンドの**運用資産残高**および**純資金流入額**が示されている。**純資金流入率**は、期間中の純資金流入額を期首の運用資産残高で除した成長率である。

公募追加型投資信託と ETF の商品ラインアップ

日本における各運用会社の商品ラインアップは次のように示している。

- ▶ **モーニングスター・カテゴリ・ブロード・グループ³**は、4つの主要資産クラスである**株式**、**債券**、**アロケーション**、**オルタナティブ**における運用会社の内訳を示している。**その他**には、転換社債、コモディティ、不動産、その他が含まれる。
- ▶ **アクティブ**と**パッシブ**は、それぞれ、アクティブ運用を行うファンド、指数に連動しその指数のリターンと一致させることを目指すファンドを示している。
- ▶ **公募追加型投信**と **ETF** は、それぞれファンドの形態を示している。
- ▶ 各運用会社の**残高上位 5 ファンド**は、ファンドの運用資産残高に基づき決定される。

3 モーニングスターは分類システムを改訂し、2025 年 10 月末より、グローバル・ブロード・カテゴリ・グループからモーニングスター・カテゴリ・ブロード・グループに名称を変更した。

一定程度のファンドの新規設定と償還は、投資家のニーズに応えるために避けられないが、過度なファンドの新規設定と償還は、市場のトレンドに安易に乗った運用戦略や、運用に対する確信が不十分なまま設定された運用戦略が多いことを示唆する可能性がある。

- ▶ **投信・ETF 新規設定率（1年）**は、基準日時点で運用されているすべてのファンドのうち、過去12カ月以内に新規設定されたファンドの割合を示している。この割合が高いほど、比較グループ内での順位は低くなる。
 - ▶ **投信・ETF 新規設定率（5年）**は、基準日時点で運用されているすべてのファンドのうち、過去5年以内に新規設定されたファンドの割合を1年あたりの平均に換算したものである。
- ▶ **投信・ETF 償還率（1年）**は、計測開始時点で運用されていたが、計測期間終了前に償還されたファンドの割合を示している。この割合が高いほど、比較グループ内での順位は低くなる。
 - ▶ **投信・ETF 償還率（5年）**は、過去5年間に償還されたファンドの割合を1年あたりの平均に換算したものである。
- ▶ **公募追加型投資信託およびETFの平均運用期間**は、各ファンドの運用年数の単純平均を示している。

運用費用水準

運用費用に関するデータは、運用会社の平均運用費用水準（カテゴリ内）で示している。

- ▶ 各ファンドの運用費用水準は、目論見書や運用報告書等に記載の総経費率（入手できない場合は実質信託報酬）を用い、モーニングスター・カテゴリ内でアクティブ・パッシブ別に百分率順位で求めている。
- ▶ 運用会社毎の運用費用の水準を評価するため、当該運用会社における各ファンドの運用費用水準の百分率順位を平均し、その運用会社の**平均運用費用水準（カテゴリ内）**を算出する。
- ▶ 各ファンドには、投資家にとって望ましい（運用費用が低い）ファンドから順に、**低（Low）**、**平均以下（Below Average）**、**平均（Average）**、**平均以上（Above Average）**、**高（High）**の5段階のスコアが付与される。
- ▶ 運用会社の全ファンドに占める、5段階の割合を、平均運用費用水準の下で示している。

サステナビリティ

ファクトシートには、ESGリスクの大きさが「平均以下」または「低」のファンドの割合を示している。これは**モーニングスターESGリスク・レーティング**に基づいており、ESGリスクの大きさが**低（Low ESG Risk）**の場合は、ESGリスク・レーティングが高（High ESG Risk Rating）（5つの地球儀のアイコンで表示される）に相当する。また、ESGリスクの大きさが**平均以下（Below Average ESG Risk）**の場合はESGリスク・レーティングが平均以上（Above Average）（4つの地球儀）に相当する。

- ▶ モーニングスターESGリスク・レーティングは、ポートフォリオのESGリスクへのエクスポージャーを定量的に測定するものである。ファンドがサステナブル投資の運用方針を採用しているかどうかを示すものではない。
- ▶ 本レポートでは、モーニングスターESGリスク・レーティングの対象となっているファンドのみを集計対象としている。

ファクトシート索引

アセットマネジメント One	21
アムンディ	34
アモーヴァ・アセット	20
アライアンス・バーンスタイン	26
イーストスプリング・インベストメンツ	35
インベスコ・アセット	27
HSBC アセット	36
キャピタル・インターナショナル	30
ゴールドマン・サックス・アセット	28
コモンズ投信	47
J.P.モルガン・アセット	33
シュローダー・インベストメント	45
ステート・ストリート	40
スパークス・アセット	38
大和アセット	19
ティー・ロウ・プライス	31
野村アセット	17
パインブリッジ・インベストメンツ	42
BNY メロン・インベストメント	43
ピクテ	29
フィデリティ・インターナショナル	24
ブラックロック	25
フランクリン・テンプルトン	39
マニュライフ・インベストメント	44
三井住友 DS アセット	22
三井住友トラスト・アセット	23
三菱 UFJ アセット	18
ミレーアセット (Global X)	37
UBS アセット	41
ラッセル・インベストメンツ	46
レオス・キャピタルワークス	32

Morningstar Manager Research Services ディスクロージャー (日本)

モーニングスター・マネジャー・リサーチについて

モーニングスター・マネジャー・リサーチは、運用商品の戦略に対し、独立の立場からのファンダメンタル分析を提供しています。運用担当者（People）、運用プロセス（Process）、運用会社（Parent）の3つの主要な評価軸についてのアナリストのリサーチに基づく見解は、モーニングスター・メダリスト・レーティングとして公表されます。世界中のリサーチチームが、投資商品、資産クラス、および各地域にまたがる戦略について、詳細なアナリスト・レポートを発行しています。メダリスト・レーティングは、意見であり、事実の表明するものではなく、将来のパフォーマンスを示唆または保証するものでもありません。

モーニングスター・マネジャーリサーチ・サービスについて

モーニングスター・マネジャーリサーチ・サービスは、モーニングスターのファンドリサーチ・レポート、レーティング、ソフトウェア、ツール、およびモーニングスター独自のデータの提供と、モーニングスターのマネジャーリサーチ・アナリストへのアクセスを同時に実現させています。銀行、ウェルスマネジャー、保険会社、政府系ファンド、年金基金、エンダウメント（寄贈基金）、財団などの機関投資家が、内部で行うデューデリジェンスを補完する機能を提供しています。モーニングスターのマネジャー・リサーチ・アナリストは、Morningstar, Inc.のさまざまな完全子会社（Morningstar Research Services LLC (USA)、Morningstar UK Ltd、および Morningstar Australasia Pty Ltd が含まれますが、これらに限定されません）に所属しています

お問い合わせ先

Morningstar Manager Research Services
ManagerResearchServices@Morningstar.com



モーニングスター・ジャパン株式会社
東京都港区新橋 1-1-1 日比谷ビルディング 6階

©2025 Morningstar. All Rights Reserved. 別段の合意がない限り、本資料は配信者の所在する国においてのみ使用することができます。本資料に記載されている情報、データ、分析、意見は、投資助言ではなく情報提供のみを目的としたもので銘柄の売買を推奨するものではありません。また、情報の正確性や完全性を保証するものでもありません。本資料の内容は、記載された日付時点のものであり、予告なく変更されることがあります。モーニングスターは、法律により定められている場合を除き、本資料の情報、データ、分析、意見を利用して行いたいかなる投資の判断、損失、損害に責任を負いません。本資料にはモーニングスターの専有情報が含まれており、モーニングスターから事前の書面による承諾がない限り、当資料の一部あるいは全ての複製ならびに再配布等の使用はできません。過去のパフォーマンスは、必ずしも金融商品の将来のパフォーマンスを示唆するものではありません。リサーチに関するライセンス利用のお問い合わせは+1 312 696-6869までご連絡ください。